
アフター・デイズ

紅夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アフター・デイズ

【Nコード】

N07900

【作者名】

紅夏

【あらすじ】

こんにちは、紅夏です。

今回、本人たつての希望で、泣ける話から移動しました。

なんのこっちゃという方は、えーと、僕のマイページに行ってもらえると、ありがたいです。

ちなみに、これは僕のお友達が書いたものです。

なんのこっちゃと言う方は、えーっと。

僕のマイページから泣ける話に行ってもらえると、本当にありがたいです。

あと、ちょっとだけ残酷な描写があるかもしれません。
ご注意ください。

第一章（前書き）

えーと、お友達のなんで、なんていったらいいんだろ？
ええ、と、がんばってくれい、菊田君。

第一章

2039年、この世界は銅色に染まっていた。

世界中どの国もただの腐ったゴミ山に成り下がり、建造物も乗り物も、ただでかいだけの箱だった。

生きている人々の目は何も写してなどいなかった。

いや、まるで何も考えたくない、そういう風に世界を拒絶するように死んでいた。

そう考えていない、いや、考えられない（……………）死人のほうはまだ、

生きていた、と感じられた。

地面はぼろぼろと崩れていて、この地に生を感じさせるものは何一つなかった。

空は赤かった。

しかし、夕日の赤さとは程遠く、錆びたような銅^{あか}というほうが正解だった。

僕は、この世界に生まれたことに意味があるとは思えなかった。生まれてから6年。

たったそれだけの時間でこの世に生きる意味などない、そう思っていた。

いや、生きる意味を、失っていた。

そんな世界で、しかし僕は生きていた。

僕は今日、細い路地に座っていた。

路地の脆^{もろ}いコンクリートに、背中を預けて座っていた。

鉄臭い、錆びた臭いが鼻をつく。

しかし、生まれたときから嗅いでいる臭いだ。
この町に、この臭いに慣れていない奴なんかないだろう。
と、いうより。

この臭いが世界の臭いだった。

コトリ、という音がして、手の中に何かが入る。石だった。
石に氣をとられ、そっちを向いた突端、
背中の壁がぐらつき、もたれかかっていた壁が崩れた。
ゴス、という音と共に、ばらばらと壁が落ちてくる。
しかし、落ちた途端に煙になって、崩れていく。

「ゲホッ！ ごほっ……」

そのまま倒れていたので、煙が入ってきてむせた。
しかし、激しくダルかったので、ダラリと倒れていた。
視界を四角形に切り取ったような形で、天井のないふきぬけのビル
から空が見えた。
相変わらずの銅い空が見えて嫌になった。が、それよりも、この脆
弱で脆く、穴だらけの世界が嫌になる。
世界がこうなったのにも、理由があった。

人は宇宙の無限の可能性に惹かれ、宇宙に手を広げた。
未知を求め、宇宙を探索したのである。

そんな中。

あるひとつの惑星で、ラグビーボールのような黒く鈍重に輝く結晶
を見つけた。

それを見た人々は、その結晶に惹かれ、魅入られた。

その結晶は全部で6個あり、形も大きさも様々だった。

人は、人類の進化の可能性を見つけたような、そんな気分になった。
その結晶を地球に持ち帰ろうとした最中。さなか

探索機クエストは小惑星メガロに衝突。

クエストは木っ端微塵こつばみじんになった。

その後、地球の一点にクエストのものであろう落下物があった。
それが落ちた瞬間、

世界の風化が始まった。

「ああ……」

僕たち人類は、この世界が崩れ去っていく瞬間ときを待つだけだった。
手で目を覆い、僕はすべてを諦めたかのように、静かに目をつぶった。

第一章（後書き）

どうぞしよう。

皆さんの感想をいただけると嬉しいです、だそうです。

第二章（前書き）

第二章です。

手直しがしたいぜよ……自己満のために！

第二章

……わ……ざわ……

……どれくらい寝たのだろうか……。

手を目からどかして空を見る。空は相変わらず錆びた赤色だ。

どれくらい寝たかもわからないがこんな空をいつまでも見ていることも出来ず、もう一度手を顔に覆いかぶせる。

腹が減っていたが、もうどうでもよかった。ダルかった。

ざわ……ざわっ

ん……？

寝ぼけていて気がつかなかったが、大通りがうるさい。

人々が騒いでいるようだ。

こんな事滅多に無かった。

風化が始まってから人々は実に静かだった。

それこそ人々が滅びることを受け入れた様に。

騒ぎ立てても何も起こらない。そんな風に達観あきらめているかのように。

実際、僕もここ最近言葉を発していない。

喋ったことといったらこの世界への不満だった。

人と話した記憶なんて、それこそない。

しかし、大通りは人の声でうるさかった。

がやがやという音が次第に大きくなっていく。

音が段々近づいてくる。

もうすぐでこちらにくる、と思った時

がさ……ッ、と。

声がしぼんでいった。

顔を上げようか、とさえ思ったが結局なにもしなかった。ダルい。

タッタッ！！

今度は小気味よく足音が近づいてくる。

だからといって顔を上げるわけではない。ダルい。

「なあなあー！」

誰かに話しかけているのか……？

「なあお前起きてんだろ」

……ん？

これはもしか……僕に話しかけてるのか？

今までに経験したことなど無かった疑問ができ、

それが気になり手を少しずらす。

「おおくやつぱ起きてんじゃん！　そこで何してんの？」

どうやら僕に話しかけてる様だが、別になにもしていない。
ただここでうなだれていただけだ。ダルいんだ。もう、全部。

「もしかして！　ビルの壁にネズミの住処すみかみたいな穴を開けてネズミの気持ちになってみたとか！？」

……何をバカなことをいつてるんだ？
そう思い、体が少し動いてしまう。

「おお動いた！　そうだったのか！　お前スゲー愉快だな！　オレの負けだぜ！」

は……！？　コイツは何をいつてるんだ？
愉快なのはお前の頭だろうと思った。

だが動いて何か言ったらめんどくさくなる気がして黙っておく。ダルかった。

「ん！？　しかもそこで寝ている！！　スゲーよ。スゴすぎるよお前はもうネズミだよ！」

お……おい。何的外れなこと言ってんだコイツ！？

「もう誰もが認めるネズミだよ」

は……！？

「ネズミの王様ネズキングだよ！」

ちょ……！

「でもネズキングって名前が安直か……」

おまえ………！？

「そうだ！ ネズ公爵だ！ ネズ公爵がいいよ！ よっ！ 天下のネズ公爵ー！ フウワ！」

自分の中で何かが弾^{はじ}けた。

「ちげーよ！ なんだネズ公爵って！？ 大体なんでネズミの気持ちになるんだよ！？ 僕はアホか！」

すると奴は心底驚いた顔をして、

「えっ！？ お前アホなのか！？」

とか言い出した。

「ちがうよ！ アホなのはお前なんだよ！？」

「えっ！？ オレはアホじゃないぜ！ 何いってんだホントに愉快な奴だな」

「………ええー」

声が出なくなった。アホだ。こいつはアホに違いない。

「んっ！？ どうした？」

「」

開いた口がふさがらない。口が動いてくれなかった。

「まっいつか！ 早く立てよ！！ こんなところで座ってても仕方ないだろ？」

「………は……？」

なんだか、その言葉を聞くと一気に自分の中で冷めるものを感じた。凍えるように冷えていく心は、冷たく、今まで開くことの無かった

冷たい口で、言葉を発する。

「別にどこいったって同じだろ」

冷たく、突き放すように。

そう、いい放つてしまった。まるで、前だけをしっかりと見据え、突き進んでいく勇者を、蔑む様^{さげす}に、中傷する様に。

そして、嘲笑う（ねたむ）様に。

だが、

「どこも同じなわけ無いだろ！ やっぱりお前はアホか!？」

そう、言われた。

まるで、正しい事が分かっているかのように。

そして、正しい事が分かっているのに何もしない者を、叱るように。

「ハッ！ ……ふざけるな！ 分かってんだろ！ 今はどこも……
寄り掛かったくらいで！ ボロボロ壊れるビルが広がってるだけだ
ろ!! そんなの……!!」

「それだけじゃ、ないだろ？ 町には人がいる。その人達は、皆違
う人だろ」

なんだか遠くを見つめる様に、透き通り過ぎてる目で空を見て、そ
ういった。

「100人いたら100人違う、1000人いたら1000個の、
いや……1000個以上の！ 新しい事に出会える！ お前だっ

てその一つだろ」

そいつがそう言った時、風を浴びた気がした。久々に。本当に久々に、この町に優しい風が吹いた。

「ほら、立てよ！ 行こうぜ何かあるかもしれないだろ？」

「……ああ……」

その時はそれしかいえずに、いつの間にか立っていた。

体が行きたいといっていた。

いや、僕の全てがそう疼^{つず}いていた。

自分の狭すぎた視界じゃ見えなかった。まだ終わっていない世界を見たかった。

僕が歩を進めた時、

そいつは言った。ずいぶん小慣れた感じで、

「あっ！ 名前聞いてなかった！ 名前何？」

「僕の名前はワタル。そっちは？」

「オレの名前はメグム。よろしくな」

「ああ、よろしく！ ところでなんで僕に話しかけたんだ？」

何気なく聞いてみた。少し、気になっていたのだ。

「えっ？ ワタルとは仲良くできそうなオーラがでてたから！」

「なんだそれ」

妙に笑顔でそう言われて、僕はなんだか嬉しかった。多分この町で、初めて笑った。

それに大通りがうるさかった理由がメグムだったという事に気づいた。

ダルかった僕は、もうここには居ない。

世界を諦めてから初めての出会いは、
うるさいくらい明るい出会い
だった。

第二章（後書き）

おお……最後がかっこいい。
珍しい……。

第三章（前書き）

今回は長いですね……
更新です。

第三章

僕は今メグムの少し後ろから大通りを歩いている。

良く見るとメグムはダボダボで体に合わない服を着ていて、上に羽^は織^おっている物に至っては長すぎて地面をひきずるほどだ。

滅びが始まった世界だが、服は変わらず滅びなかった物の一つだ。だから、せめて服だけは、とオシャレをするものもいる。

まあ、たいていの人々は何かあった時のため動きやすい格好をしているか、鎧の様なゴツイものを着ているやつもいる。

メグムの格好をもう一度見る。

そう考えるとメグムはどちらにも当てはまらない格好をしている。さつきから会話もあまりなかったのでそれも含めて聞いてみることにした。

「なあメグム。なんでそんな格好してるの？」

メグムは首だけこちらに向け、服の肩の辺りを引っ張って答えてくれた。

「えっ？変かな？」

僕は疑問で返されたので、

「いや、別に変じゃないけど……」

と、あまり考えず答えてしまった。

「そっかぁ？　ならいいや」

メグムがそのように切り返してきたので、その後の言葉が見つからず会話は終わってしまった。

理由を知る事も出来ずにまた無言になったから、この無言がさつき

より嫌な感じがした。

何かないか、何かないか、くそう僕の語彙^{いふ}のしよぼさめ……と頭の中でなにか会話できる言葉を探していると、

「オイ！ まてー！！」

という怒鳴り声が聞こえた。

僕は打開策がいいタイミングで飛んできたような気がして大袈裟に反応する。

「おっ！ 怒鳴り声が！ 何かあったのかな！？」

メグムは大袈裟でも何でもなく素のまま僕と同じくらい反応した。

「何かなきゃあんな声出さないよな！ 行こう！」

メグムがのってきてくれたので、僕も大袈裟に「よっしゃ！ 行こう！」と答える。

僕が答えてすぐにメグムは走り出した。足の速さがいつもより早い上に目がキラキラしているのが後ろからでも分かる。

大通りから細い路地に入り、路地にばらまかれた機械の様に見えるゴミを器用によけ、二本ほど奥の大通りに出る。

大通りにでるととても一回見ただけじゃよくわからない光景が広がっていた。大通りにいる全員が下を向いて何かを探している。

「……！？」「……！？」

二人して驚いて一度顔を見合わす。

二人は例にならって下を見る。

「……」「……」

何かあるのか？

そう思い、顔を上げて叫んだであろうオヤジを見る。

顔が怒りで赤かったためにすぐわかったが、

そのオヤジも下を見ている。

なんだこれ。なにがあつたんだ。本当にわからなくなってきた、その時。

「そつちに行つたぞお！」

と声が響いた。

叫んだ男の指が、指している先はこちらに向いている。

……うん？

行つたぞ！ ということは、動くなにかなのか？

もう一度、怒り狂つて今にも襲いかかつてきそうなオヤジをみる。
コワイ。

オヤジの後ろにはざつと広げられた木の台に、林檎やみかんなど果物が並べられている。

そうか……わかつたぞ！

オヤジの店の果物をネズキング……いや、ネズミが何かに取られてそれを取りかえそうとしてるんだ。

なら下にいるはずだ……と思った時、横を通りすぎる何かを感じた。

その一瞬だったが、僕は今日二度目の風をあびた。

メグム同様の、気持ちのいい風のような気がした。

「まあてまてまて〜！」

僕がそんなことを考えていると、メグムはすでに逃げたそれを追っていた。

ハッと正気に戻って、自分も追おうと思い後ろを向く。

なっ！！？

メグムが平然と追っているのはネズミではなく――G（黒くて憎いあいつ）でもなく、人だった。

「ちよっ……ちよつと待って！！」とりあえずメグムを呼び止める。

「ええっ……なんでだよ？ 逃げちまうよー」

メグムは足踏みをしつつ、焦った顔をこちらに向けている。

「いやまってよ！ えっ何？ 人じゃん！ どうやってあんな……！？」

僕は驚きでオロオロしてしまった。不覚だ。

「いや人だけと関係ないだろ！？ 果物泥棒を捕まえるぞ！ スピードアップ！」

そういうと、さらにスピードを上げ、そのままメグムは走っていった。しまった。

「えっ！？ あゝもう！」

僕は考えることをすべて放棄した。

とにかく追いかけて……って速っ！　なにあのスピード！
……しかし、僕たちが追いかけている人もかなり速かった。
それこそ—G（かさかさ動くあいつ）を思わせる手と足を使いたい
走りっぷりだった。

「スゲー速さだなー！　ネズ公爵の後はG皇帝かよ！　今日は変な
のに良く会う日だなー！」

……？

メグムが変なことを言っている。が、ネズ公爵はメグムが勝手につ
けたあだ名だ。

しかも1番変なのはメグム本人だということをわかっていない。
さて、どこからツツコミを入れようか？　と、考えていると。

—G皇帝（果実泥棒）がこちらに走ってきた。

「えっ？　こつち来てる！？」

僕はメグムに顔を向けた。そこで見たのは、

「よっしゃ捕まえろー！」

と言って、両手を振って喜んでいるメグムだった。

僕は両手を広げてしゃがみ込む体勢になった。

しかし、G皇帝はその横を軽くかわして過ぎさっていった。

「ああー！？」

メグムは大袈裟なくらい大声を上げた。が、これはメグムの普通の
テンションだ。

「何やってんだよワタルー！」と、言われ、僕はとつさに

「いや、すごい速さだったんだよ」とあっさり返していた。

そんなやり取りをしていると、G皇帝は少したったところでターン
をキメていた。

どうやら行き止まりだったらしい。

G 皇帝はそのまま体勢を整えメグムに向かって走って来た。

「なんだよ！今度はこっちにか？　そう簡単に抜かせねーぞ！」
そう言っただけの岩を掴んでいた。

「メグム！あの速さじゃそんなのあたんないよ！？」

と、そういつつG 皇帝に指をさした僕に、

メグムはニヤツと笑いながら「いいのいいの」とか言っている。

……あゝ全然わかんねえよ！

なんだよもう、と思い考える事を放棄した。最近よく放棄するな、
考え。

「よっしゃいったれ」

キャラ崩壊もなんのその。今はG 皇帝を止めてもらうためにメグム
を応援することにした。

僕の声につられ周りの人々も「いけー！」とか「やっちまえー！」
とか思い思いにヤジを飛ばしていた。

そしてG 皇帝がメグムに近づき、後数メートルとなった時！

メグムは持っていた岩を自分の足元に思いつ切り投げた。

ドズンツと重い音と共に地面がめくれ上がった。

普通の地面なら人が持てるほどの岩くらいではめくれ上がらない。
が、この世界の地面は脆^{もろ}すぎた。

土の壁は脛^{すね}ほどになっていてG 皇帝を驚かせていた。

G 皇帝はしりもちをついて両手で体を支えていた。

メグムはニッシッシシー、とふざけた笑い声をしていた。

「どーだ！ 土壁大作戦！」

と、僕に笑いかけてきた。

僕は正直あつけにとられ、驚いた顔をメグムに向けるしかなかった。メグムは僕の顔を見て満足そうな顔をしてからG皇帝に向き直った。

「どうだ！ 観念しやがれ！」

そう、メグムは睨むような目をしてG皇帝に言い放った。

G皇帝は服からぶどうや桃をボタボタと地面に落とし始めた。焦りからか手は震えていた。

「おおー？ 意外に素直だな。それが終わったらオヤジさんに謝れよ！」

メグムが笑顔で言い終わると、ちょうど盗んだ果物を全てだし終わったようだ。

「なんでこんな事したんだよー？」

と、メグムは聞いたがG皇帝はその質問を無視して追ってきたオヤジさんに頭を下げ、僕たちが出てきた細い路地に走っていつてしまった。

「オイッ！ 待てよー！」

と言ってメグムも走っていつてしまった。

僕は二人が行ってしまった細い路地を見た後オヤジさんに形だけのお辞儀をして後を追った。

路地に入るとG皇帝を追いかけるメグムの背中が見えた。

走り出そうとした時背中にオヤジさん達のお礼の声が聞こえた。

数年ぶりの人からのお礼に少し顔が綻ほころんだ。

追わなければいけないことを思い出し、僕は軽い足取りで走りだした。

~~~~~

「待てよー！」

俺が追いかけるとG皇帝は焦って思い切り走っていつてしまった。それでも焦っているからスピード的にはそうでもない。

結構走ると追いつきそうになったが、そこでワタルを置いてきてしまったことに気づき、後ろを向いた。

ワタルは何故か笑顔で下を向いていて意味がよく分からなかったので放っておく事にした。

前に向き直ると誰もいなくなっていた。が、スグそこに曲がる道があったので曲がったんだろうと思った。

曲がり道に入るとG皇帝がこちらを向いて走っていたが俺を見たとたん黒い石に足をぶつけて転んでしまった。

俺はスグそこに走り

「大丈夫か？」

と手を差し出した。

G皇帝は俺の手をとらず座ったままこちらに向き

「お前！ なんなんだよ！？ 果物ならもう全部返したぞ！」

と叫んできた。

俺は別に果物をまだ隠しているとなんて思って無かったから「ちげーよ。なんで果物を盗んだかを聞いてないから追ってきたんだ」

正直に答えた。

G皇帝は顔をしかめたが、

「腹減ってたから盗んだだけだ！」

と、ふて腐れたように答えてくれた。

だけどぶどうや桃じゃ腹は膨れないだろー。

「嘘つくなよ。ぶどうなんかじゃ腹一杯になんかならねーもん！」

ふふん、強気で答えてやった。すると、

「っ！ 別にお前に関係ないだろ！」

返ってきたのは、別に理由があることを認めるような言葉だった。

「関係あるよ！ わりーことしたお前を止めたのは俺なんだから」  
そう返してみる。

「そっそれは……そうだけど……」

と、黙ってしまった。

それにしてもさっきから素直な反応ばかりしてくる。

こんな素直なコイツが盗みをしなければいけなかった理由がますます気になる。

少し、間をおいて。

「……姉ちゃんに食わせたかったんだ……」

「……えっ……？」

と俺が話した時丁度ワタルが走ってきた。

~~~~~

前を見るとメグムの姿はもうなかった。

「ヤバイ〜！ 見失ったあ！」

この道は先が長いから真っすぐ走っていたなら見えるはずだ、でも今は見えない。

と、いうことはどこかで曲がったということだ。

「フっ……」

今ここから見えるだけで曲がり道は7つあった。

僕はどうすることも出来ないので見ながら進むことにした。

最初の曲がり道は機械のようなゴミだらけで進める様子じゃなかつ

た。

二つ目の曲がり道は人は少しいたがメグムの走る姿は無かった。
三つ目の曲がり道を覗くと、する程長い服をきたメグムが見えた。
その奥に、泥棒も。

急いで走っていくと、何故かメグムはいい表情をしていなかった。
どうしたのか聞こうと口を開くと、それをメグムに手でふさがれた。
そしてメグムはG皇帝に視線を移した。

G皇帝が何か話してくれるという事に感じて僕は耳を傾けた。

「オイラには姉ちゃんがいるんだ。姉ちゃんは変なもんが落ちてきたから出てきたっていう新しい病原体に体を蝕くさまれたんだ。そのせいで、後一週間ともたない命なんだ。だから、最後に……姉ちゃんが好きだった桃を食べさせたかったんだ。」

G皇帝が話し終わると、メグムの手がどいたので僕は疑問を口に出した。

「なあ、お父さんとか……お母さんに買ってもらったとか。そんな手はなかったの？」

僕はその暗い過去に触れ、驚きもあった。だから、声が震えていたかもしれない。

「父ちゃんと母ちゃんなら死んだよ。変なのが落下した時の衝撃であの衝撃で死んだのは数名だった。けど、その中にオイラの家族がいたんだ。もう、意味わかんないよ！ 宇宙なんて関係ない、遠い世界の落とし物のせいで！！ なんでオイラがこんな目に合わなきゃいけないんだよ！！」

最後の言葉は、叫ぶ様だった。

目の下に涙を浮かべ、あの一狂おしい日（世界の終わり）に突然変わってしまった、誰ひとり望んでない、世界を嘆く様に。

それでも、言葉は切れなかった。

「なんでオイラ以外は……！　なんでオイラの大切な人達は……！　オイラの周りにいてくれた家族や友達だってなくした！　それなのにオイラはこうやって生きてる！　オイラを残してみんないなくなつて……こんなの……なんで……？」

ぽた、……と。

涙が頬を伝つて地面に落ちた。

地割れを起こしている地面は、涙をすぐに吸い込んでつた。

今自分の目の前にいる同年代の少年の周りにいるのは、家族や友達ではなく終わっている世界だということを見せ付けるようだった。

この少年の涙を拭ってくれる温かい存在は、もういなかった。

僕は涙を見た瞬間悔しくなっていた。

僕は、自分の手で名前も知らない泥棒少年の涙を拭った。泥棒少年は何も言わず、涙を流しつづけた。

「ワタルも泣いてるじゃねーか」

そう言つて僕が気づかず流していた涙をメグムが拭ってくれた。

僕らは涙を流すことしか、今はできなかった。

それから泣きつづけていると、最初にメグムが泣きやんだ。

それに続いて泥棒少年も泣きやんだが、僕は泣き止むことができなかった。

結局泥棒少年の肩をかりてどうにか落ち着いた。

僕が泣き止むとすぐにメグムが、

「なあ。まだ名前聞いてなかったよな？ 俺の名前はメグム！ そっちがワタルってんだ！」

と、さっきまでの涙はなんだったのか分からなくなるほど明るく聞いた。

「オイラの名前は、ヒカル」

やっぱり素直だな。僕は思ってしまう。

メグムは話を切り出した。

「なあ、こんなこと言うのは悪いけど。お姉さんは長くないんだろ？ ……もし良かったら、お姉さんのことが終わったら俺達と行動しないか？」

メグムはヒカルの顔をあまり直視せずに言った。

ヒカルは顔を少し曇らせ、

「というか……おまえらは何してるんだ？」

と、聞き返してきた。

メグムは僕に言ったように、「この世界のまだ終わってないところを探しに行くんだ。」

さらに明るく、そう言った。

ヒカルは不思議そうな顔をして。

「言っちゃ悪いが、そんなことか？ 時間が勿体ない気がするぞ。」

と、あまりいい反応ではなかった。

メグムはここで初めて、ヒカルの顔を直視した。

そして、まっすぐにヒカルの顔を見て言った。

「いや、勿体なくない。これは絶対お前ら二人に必要なだ。お前らはこの世界が終わってるって思ってる。でも……そう思ったままなんてダメだ！ このまま全て終わっちゃったらお前らはこの世界のい

い部分を知らないことになる。俺に少し時間をくれ……！絶対に
見せるから！ お前らがその両目でずっと見ていたいと思えるよう
なものを見せるから！ もう一度言っ！俺と一緒に来てくれ！」
…… かつこいいセリフだ、本当。

僕は答えはもう決まっていた。メグムの言葉を聞いて確信した。
見れるはずだ。僕が見ていたいと思える物のある世界を。

僕はキッパリ、「ああ、これからもヨロシク」
そう言った。

ヒカルの方を向くと、何かに当てられたような顔していたが、スゲ
に、「オイラに、絶対！ 見せてくれよな！」
と、メグムの目をまっすぐに見て言った。

やっぱり早く進みたい。

この足を一步でも多く動かして見てみたい！
たぶん今のヒカルもそう思ってる気がする。

ふいに、ガタガタガタ、と耳障りみみざわな音がした。これは何の音だ
ろう……？

まるで、そう、戦車のようだ。ザラついて、ギラつくような不快な
音だ。

メグムがこっちを見て、「よし、見にいくっ！」そう言ってすぐに
走っていった。

僕はヒカルと顔を見合わせて、ふっと息をつき、メグムの後をつい
ていった。

何かある気がする。

それがいいことか悪いことかはわからない。

けど、今の僕達ならどんな出会いも楽しめる気がする。

第三章（後書き）

むむ、ほんとに最近かつこいいな、これ。

……バトルになればいいなあ……（中二病）

なれば俺もちよつとは力になれるのに……

それが残念なことになったら目も当てられないけど。

第四章（前書き）

今回も割と長いですな。

がんばれ菊田君！ アフター・デイズは君にかかっている！

あと、今回残酷な描写があります。ご注意ください。R15ぐらいですかね？

ちょっとした事情があつて、少し変えました。

ご迷惑をおかけしてしまい、真にすいません。

第四章

少し慌ててさっきいた大通りに出る。

音のした方に目を向けると戦車のような車（？）があった。

デカイ。

ただ、デカイのである。

果物屋がタイヤに負ける程の大きさだ。

しかも、その周りをフルフェイスのヘルメットに防護服、それに大型の銃という武装した集団が護衛する様に周りを囲んでいる。僕はその迫力を見て驚いた。が、それより彼ら自身に驚いた。

ヘルメット越しに見える目や、彼らのふざけた存在感がこの世界に似合いすぎた。

周りを見渡せば、僕の目にはやっぱり終わった世界が映る。

そんな世界で生かされている僕らと彼らとでは、まるで違う物を感じた。

望まぬ世界で生かされてるのではなく、望んだ世界で生きている。僕にはそうとしか思えなかった。

僕はそんな人間を見たのは初めてだった。

あまり気分は良くないが、これもまた出会いなのかもしれない。

……僕の視界が少し開けたのかもしれないな。

メグムに会ってから二度目の出会いは、疑問だらけの出会いだった。

僕は二人の様子が気になって顔を見える。

二人ともあまり良いとは言えない顔をしていた。
そんな中、初めに声を出したのはヒカルだった。

「なんか……嫌な感じ、だな」

抽象的だったが、確かにこれは感覚的にとても嫌になる光景だ。

ヒカルにとつての仲間になって初めてであろう出会いはあまりに皮肉な出会いだった。

数分立つと集団が散り散りになって大通りの端に集まる人々に話しかけているのが見えた。

話が終わるたび、人々は口々に「どういうこと!？」やら「ふざけるな!」との疑問や罵声を浴びせていた。

もうすでにメグムは走って人々の輪の中に入っていく話を聞いていた。

ホントに騒がしいことが好きなんだな……分かってたけど。と、僕は切に思った。

そんなことを思っていた矢先。

メグムがこっちに走ってくる。

僕はここで初めてメグムが焦っているところを見た。

ヒカルの目の前になると前かがみになって手でヒカルをこっちにこいと手招きしている。

ヒカルが走って行き、スピードを上げて帰ってきた。

ヒカルがくると息が切らしながら、

「ハッ……! ハッ……。やばそうだぞ! 爆弾を使ってこころー
帯吹っ飛ばすって!」

は……………？ 何を、言ってるんだ……………！？

僕は、今の話で出来た疑問をメグムに聞く。

「……………えっ？ ……なんで吹き飛ばすの？ 理由は！？」

僕も焦っていて良く話せないが、ヒカルも口を開けてそのままだ。

「いや……………なんか探している物がここにあるから、それを探しやすくするために一度全部吹っ飛ばすって！」

……………えっ？

なんだ、メグム以上のアホじゃないか。探したい物があるからここら一帯を吹っ飛ばす？

ふざけんな。常識くらい身につけてから人に物を言えよ。

……………しかし、そこまでして探したい物ってなんだ？ 大体、こんなぼろぼろの世界の物だぞ。

そんな爆撃なんかに耐えられるわけないだろ。

それでも何か気になってメグムに聞いてみる。

「それで、探してる物ってなんなの？」

メグムは少し困った顔をして、

「あっそれはまだ聞いてない……………」

メグムはこんなところでテキトーだった。

「えっ？ でもどうしたらいいの？ ここにいたら爆発に巻き込まれちゃうよー！」

そこでヒカルは気づいた様にメグムに聞いてきた。

「なあ、ここら一帯って……具体的にどれくらいだよ？」

言っている途中からメグムとの距離を詰めて言い終わるころにはもう、メグムとの距離はなかった。

「えっと……」

メグムが思い出そうとすると待ちきれない様にヒカルが服を掴んだ。

僕はヒカルの顔から少しずつだが血の気がひいている様に見えた。

「なあ、どれくらいなんだよ！」

ヒカルの疑問に対してメグムは答えられない、そう言っている様に「悪い！！スグ聞いてくるから！」

と、険しい顔をして走っていった。

ヒカルは振りほどかれた手を握り締め、メグムの走っていった方を見ていた。が、顔を一瞬しかめてメグムの後を追って行ってしまった。

僕は一人になって、ヒカルの顔を思い出して嫌な考えが浮かんた。早く逃げろ、だと？

逃げたくても逃げられない人だっているんだ。

例えば、ケガをしている人。

例えば、足腰の弱い老人。

例えば、何も知らない小さな子供。

例えば、原因不明の病に冒され、床に伏^ふしている誰かの家族。

それでもどうにも出来ない僕は、あの時と同じく銅^{あか}い空を見て、メ

グムに願うしかなかった。

メグムがどうかしてくれると思うしかなかった。

~~~~~

頼むから、大きな範囲で爆発を起こさないでほしい。  
神でも何でもいいから、姉ちゃんを助けてくれ。

もう、オイラから、何も奪わないでくれ。

オイラから親を奪ったこの世界は、今度は姉ちゃんを奪おうとして  
いる。

もう、オイラには一人しかない家族を……

足を急がせて、前にいるメグムに追いつこうとする。

足が絡まってオイラは思い切りこけてしまった。

地面に頭をぶつけた痛みは、そのまま自分の弱さに変わってココロ  
を抉<sup>えく</sup>った。

込み上げて来るものは、目から涙としてこぼれていく。

さっきの涙よりも大粒だった。

そのためか割れた地面はスグには涙を吸ってくれなかった。

オイラから全てを奪った世界は、オイラからでた弱さを吸ってはく  
れなかった。

この現実が、この世界が、無力な自分をせせら笑う様で、もうオイ  
ラのココロはボロボロだ。

「神様なんていやしない。誰も救ってくれないからオイラが……オイラが姉ちゃんを……！」

自分を勇気づけるために自分に言った言葉は何も出来ない現実のせいで、さらにココロを抉るだけだった。

ここで、立たないと。姉ちゃんは……！

どうにか上げた顔の先に、人が立っている。

こちらに手をさしのべて、さつき会った、賭けてみようと思えた男が立っている。

「メグム……」

名前を呼ぶと真剣な顔になって、

「確かに、神なんていないよ……。だから、オレがヒカルを救う

！ ヒカルの姉ちゃんがもしやバイなら、ヒカルと一緒にオレが救う！ 誰も救ってくれないなら、オレが救ってみせるから！」

涙がもう一度流れたが、この涙は生まれてから初めての嬉しい涙だった。

汚れた手を伸ばすとメグムは強く握って引っ張ってくれた。

~~~~~

「ここから7キロくらいのところにオイラの姉ちゃんがいるんだ。病院の近くでまだ水のきれいな井戸もあって……それで、それで」
ヒカルは姉ちゃんのことと頭がいっぱいなんだろう、口がうまく回っていないかった。

「落ち着けよ。とにかく今は爆発の範囲を聞こう!」

……今は、そうするしか無かった。

人だかりにつくと、その人々が黙っていた。

理由はわからなかったが、話しやすかったので逆に好都合だった。

「なあ、爆発の範囲つてどれくらいなんだよ!？」

兵士はこちらも見ずに、

「現在は7キロ〜8キロとされています」

えっ……？

……最悪だ。

オレはヒカル顔も見れず強張ってしまった。

冷や汗が背中を伝^{つた}うのが分かり、やり切れなかった。

そこで、俺は気づいた。

周りの人々の目には割れた地面の土の色がうつっている。

誰もが、下を向いて暗い顔をしている。

なんで……こんなことになってるんだ？

俺はヒカルが気になって、顔を確かめる。

ヒカルの顔がおかしいくらい青ざめている。

そうだ……。まずはヒカルの姉ちゃんのことを、どうにかしてみせるさ、絶対!

「……探してる物って何ですか？」

俺は落ち着いて聞いてみた。

「すいません。関係ない方には教えられません」

本当に無機質だ。

それに、冷たい。

人としての暖かさがまるで感じられない。

そう考えると、周り全てが冷たく感じた。

オレを囲う人々は冷たかった。

なんだか、それに飲み込まれそうになって周りを見渡す。

冷たすぎる顔の中で、遠いワタルの顔を見つけた。

今は俺とヒカルを心配してるんだろ。

表情は良くないがそれでも人の暖かさを感じた。

あいつは確かに俺達を見てくれている。

なんだかわからないが、少し勇気がでた。

俺は前を見据えて、

「関係ない訳がないでしょう？ それに俺はアンタらよりここに詳しい！ 探しものならすぐ見つかるはずだ！」

オレは見つける自信があった。

根拠や理由は無いけれど自信があった。

「それでも教え「教えてやれ……」……。」

話の途中で車の中から声がした。その声は低く響くように聞こえた。男は車に目を向けず、自分の腰のポーチから紙を取り出して俺に広げて見せてきた。

「この石だ」

男はその一言しか言わなかった。

見せられた紙にうつっていた石は、どこかで見たような石だった。

それは黒く重そうな……そうか！ ヒカルを追っている時に、ヒカルがつまづいた石だ！！

「すぐ持ってくるから！ 爆発なんて起こすなよ！」

オレはそれだけ言って方向転換をした。

「ヒカル！ 大丈夫だ！ これで姉ちゃんを救えるぞ！」

ヒカルはその声にすぐ反応し、

「どうしたらいいの？」

そう、聞いてきた。

俺は生きてるヒカルの目が見れて嬉しかった。

「説明するからついて来い！」と言って俺は人混みを掻き分けて走った。

その時たまたま聞こえた男達の話に、オレは耳を疑った。

~~~~~

人混みの中から出てきたメグム達の姿を見て僕は安心した。

二人はどんどん僕の方に近づいてきた。

「どうだった！？ 何かわかった？」

僕は口早にそう言ってしまった。

「まあ、何とか止められそう。オレ達がいた所にあった黒い石。あれを持っていけば爆発を止められる！」

メグムが言った言葉を理解し、さっきまで自分がいた場所を思い出す。

「あっ！ あの時ヒカルの隣にあった黒い石か！」

僕は、あの吸い込まれる様に黒く輝く石を思い出す。

そう言えばそうだ。

頭にこびりつく様に覚えている。

ヒカルは僕の言葉を聞いて、「オイラが取ってくる！」

と言い、答えも聞かずに行ってしまった。

「僕達も行く？」

僕はメグムに聞いてみる。「俺達も……！ いや、ここで待ってよう」

何か言いかけたようだったが、今は気にならなかった。これで大丈夫だ。

やっぱり、メグムが何とかしてくれた。

僕はメグムを見て少し誇らしかった。

少し時間がたち、ヒカルが細い路地の奥から走ってくるのが見えた。

「オーイ！ ヒカル！ こっちに渡してくれ！」

と横のメグムが言った。

ヒカルは、「重いから転がすよ！ 早く届けてくれ！！」

と言い、黒い石を転がした。

黒い石はゴロゴロと重い音を出してメグムの足にぶつかった。

メグムはそれを拾って車の方に走っていった。

僕はメグムの後を追うことにした。

メグムはある程度近づくと、急に立ち止まった。

僕は驚いてコケそうになってしまった。

メグムが止まると、さっき話していた男が人混みから出てきた。

「協力ありがとう。これで爆弾の使用が防げたよ」

そう、まったく感情のこもっていない礼をした。

メグムは男の顔を睨みつけ、「これが欲しかったらここから出て行け！ 爆弾は使わずもって帰れよ」

といった。

僕は言葉の意味がイマイチわからず、首を傾げた。

「見つかつて吹っ飛ばすって言ってな……そこのお二人さんが」

メグムははじに立っている二人の男を顎で指した。

会話をしている男は銃を構え、銃口をこちらに向けてきた。

しかしメグムは怯まず、男から目を離さなかった。

「オレをやるのはいいけど、この町に手を出すなよ」

は……！？　メグムはいいのか？　そんな、自己犠牲でこの町を救うだなんて。

そんなの、ダメだ！

「メグム！？　なにやってるんだよ！」

ヒカルは叫んでいた。

「面白いな……この世界でそんな目が出るのか？」

車の中から響くような声がした。

その声を聞いた瞬間、男は確実にトリガーに手をかけた。

「メグム……！」

僕は、ここで恐怖を感じた。しかし、それでもメグムは、

「ゴメン……ワタル、ヒカル」

そう言った瞬間、男の手が動き、銃声が響いた。

その時同時に、人を突き飛ばすような音が聞こえた。

その瞬間、何か赤く、紅く、銅い色の液体が、僕の腹あたりから吹き出た。

熱く、焼けるように熱く、僕の腹が溶けたように思えた。  
ぐずり、と、激しく、そして、蕩ける様とろな音と共に、

「じッ……ふ……」

僕の体に、赤黒い風穴が開いた。

「えっ……？　ワ……ワタル——！！」

熱い。

熱く、熱く、

そして、冷たかった。

腹の辺りを軽く触ると、生暖かい液体を感じた。  
手を見ると真っ赤だった。

見たことも無いような、真っ赤な真っ赤な赤だった。

#### 第四章（後書き）

おお！

ワタル君がピンチに！

一体どうなってしまうのか！

ドキドキハラハラの展開です！

お楽しみに！

## 第五章（前書き）

テスト期間？

フツ……俺たちにそんなこと関係ないね……

今回もわりと長め……

## 第五章

~~~~~

は……？

なにやってんだ、ワタル？

あれ？

俺が撃たれないでワタルが……？

「オイ！　ワタル！」

俺はワタルにさっき崩された体を起こしながら名前を呼んだ。

立った瞬間体がふらついた。

恐怖で足が震えたから。

別に銃で撃たれる事が怖かったんじゃない。

ワタルの命が自分の目の前で確かに消えていくのが怖かったんだ。

自然と目元が熱くなってスグに視界が揺らいだ。

頭の中は理解が追いつかず、使い物にならなかった。

そのためか、心で思ったことがいつもとは比べものにならないくらい重く感じた。心がじりじりと焼けるように痛かった。今の心は恐怖に染まっているはずだ。

倒れる様にワタルの左隣にしゃがみ込む。

右手で背中を持って左手にある黒い石をその場に捨ててワタルの腕を引っ張る。

「ワタル！　なに……やってんだ、お前！？」

俺はあの時死ぬ覚悟は出来ていた。

死ぬのは確かに嫌だった。が、誰かが死ななければいけないことは誰だって解っていたはずだ。

あそこで俺がああ言わなかったらこの町は爆発されていた。

しかし、俺がうたれることで車の中にいた奴なら考えを変えるだろうと思った。

根拠はないがスゴイ奴とはそういうものだ。

俺一人の死でここにいる全員を救えるなら安い事だと思って言ったんだ。

それなのに俺は撃たれずワタルが撃たれた。

結果として、最悪だった。

…… 本当に全く、

「何やってんだよ！　ワタル！！」

どうして、こうなる？

ワタルの顔に水滴が落ちる。

くそっ……！！

俺は……今、涙を流す事しか出来ない。

「怖かったから……」

「えっ？」

ワタルの口が突然、開いた。

「なんでもか、分か、ら……ないけど……怖かったんだ……」
痛みのせいだろうか、言葉は途切れ途切れだった。

「ちよっと、前は悔しかった……その、前は……楽しかった。もつと、前は、つまらなかった……。だから、これ、この気持ち……全部初めての気持ちだったんだよ……」

何、言っただ……突然？

「しっかりしてくれよワタル!!」

「なんで、こう、思ったんだろう?……そうだ、頭で考えなくても、心が勝手に、感じ、たんだ……その、理由……知りたかった、な」

そんなの、今から考えればいいだろ!

俺の手に伝わるワタルの血が、嫌になるような自分の考えを強くする。

……ふざけるな!!

「それならこれから解ればいいだろ!!」
笑って言ってやりたいけど、自分が今までどうやって笑っていたかがワカラナイ。

「ハハ……そう、だよな……これから、だもん、ね……ヒカルも、一緒に、なって……新しい、世界を……見るん、だか、ら」

どんどん、言葉一つ一つの間が広がっていく気がする。
その分、心に深く浸透していった。

「今なら……見える、気が、するんだ……。だって、自分で、動け

るから……思った時、に、思った、様、に……動ける、から……。
だから、そう、メグム、を、助ける、事だって、出来た……ん……
だ……」

と。

そこで、ワタルの言葉が、切れた。
ワタルの目が、閉じた。

「ワタル……！？　ワタル――――！！」

俺は、ゆっくりワタルを地面に寝かせた。

そんな、この世界の一部になってしまったようなワタルを見ると、
どうしようもなく悔しくなった。

ありがとの一言さえ言えず、ただ涙を流すことしかできなかった
自分が悔しかった。

俺は撃った男を思い切り睨む。

ワタルを撃った銃口が、こちらに向いた。

足元にある黒い石を持ち上げる。

高々と上げ、見せ付ける様に。

「こんなもののタメに！」

そう叫んで、ワタルの右上に投げる。

石はやはり硬く、傷一つ見えなかった。

石は転がって行き、ワタルの頭のほうに触れた。

俺はもう一度男を見て歩き始めた。

~~~~~

メグムが僕のことを見て泣いている。  
メグムは悲しむとこんな顔するのか。  
涙でくしゃくしゃだ。

僕のために泣いてくれてるのか……優しいな。

撃たれた場所が、じくりと痛む。

いや、痛む、なんてちやちな物じゃなかった。

撃たれた。と、気づいた瞬間、狂わない事が不自然なほどに苦しかった。

メグムがそこで何か喋ったのは分かったけど。

痛みで、よく聞き取れなかった。

耳を、澄<sup>す</sup>ましてみる。

「何やってんだよ！　ワタル！！」

お、今度は聞き取れた……？

そう言われればそうだ。

なんでこんなことしたんだろ？

怖かった？

……そうだ。確かに、僕はあの時怖かったんだ。

「怖かったから……」

この一言がでると他の気持ちもズルズルでてきた。

後は出てきたものを言い続けただけだった。

一言話すたびに色々な思いがココロの奥から出てきた。

その思いは、僕の生きたいという気持ちを強くしていった。

そのたびに撃たれた腹が痛みを増していき、最後の言葉の時は目がくらんだ。

ああ……

銅い空が見える……

……、あ、れ？

メグムの目が、銅い。

そうか。

あの空は、人の悲しみの色だったんだ。

だからあんなに切なくて、深くて、惹かれて……そして、終わりが見えないのか……

人の悲しみとの出会いは、もう、とつくに済んでいたみたいだ。

もう、限界なのかな……

自然と、目が閉じた。

「ワ……ル……タルー………！」

メグムが、名前を呼んでくれたんだろう。

今は、目さえ開かない。

そのまま僕の体は、温かいメグムの腕から、冷たい地面の上に置かれた。

背中に伝わる冷たさも痛い。

足音だろうか、砂のすれる様な音がして近くに何か落ちるものを感じる。

それは額ひたいに当たって止まった。

さっきまで開かなかったはずの目が、なぜか開いた。

僕の視界に果てのないような純粹な黒が広がった。

本当にココロが惹かれる。

そんな時、僕の視界にメグムの背中が映る。

メグムは何をしようとしてるんだ？

まさかあいつらに何かするんじゃないよな……。だとしたら、止めなくちゃ。

体に力を入れたが、腹の痛みが増えるだけで体は動かない。

そうだ、ヒカルに止めてもらおう。

「……ヒ……ヒッ」

声くらい出てよ。

「ヒ……」

声が出ない。

誰か、誰か、メグムを止めてよ。

誰でもいいから、早くメグムを止めてよ！

僕の視界にもう一度、黒が広がる。

もうなんでもいい。なんでもいいから、メグムを……メグムを、止めてくれよ……！

僕には、やっぱりムリだったんだ。

メグムを、助けるなんて。

僕はそう思いながら、無意識に、血で真つ赤な掌てのひらで黒い石を触った。そのまま動けなくなかった手は、黒い石に血の跡あとを残しながら落ちていく。

手が石から離れる瞬間、僕はあることに気づいた。

傷が、痛くない。

それだけじゃない。

力が溢れる気がした。

今なら……立てる!!

僕は両手を地面に立て、足を丸め込ませるようにしてから足の裏を地面につける。そのまま力を入れて立った。

俗に言う、ジャックナイフの要領である。

ふらつくのを踏ん張って、声が出るのか確かめる。

「あー、アー」

出る。

声が、出る!!

僕は顔をメグムの背中に向けて、

「メグム!! 行っちゃダメだ!!」

メグムはビクツとしてこっちに顔を向けた。

「ワタル……なんで？」

メグムは本当に驚いた顔をして聞いてきた。

「僕にも分からない。けど、そっちに言っちゃダメだよ」

僕は足を進めようとしてふらつき、倒れそうになる。

「あっオイ! ワタル!」

メグムがこちらに来ようとしているようだが間に合わないだろう。倒れると思った時、誰かが背中を支えてくれた。

ヒカルかな？

「大丈夫か？」

ヒカルだ。

僕は二人の声を聞いて安心した。

「ええっ！？　ワタル、血だらけじゃないか！？　どうしたんだよ」  
メグムが走ってくる。

僕はヒカルに礼を言っ、ヒカルの手から離れ自分の力で地面に立つ。

もう、痛みはない。

疲れてはいるけど。

今はメグムがヒカルに説明をしている。

ヒカルは驚いたり怒った顔をしたり、忙しそうだ……

なぜか今は周りのものが優しく見える。

僕を撃った男でさえ見たって苛つかない。

なんだか気分が良かった。

気分が落ち着き、しっかり立てるようになった時、車から声が聞こえた。

「あれえッ？　あいつ、立ってるよ？　なんでだ？」

さっき聞いた響きのある声とは正反対の声だったのでメグムとヒカルも車を見ている。

「なんだよ。しっかり撃てよ、ハイッかまええ」

ヤバイ。男達が銃を構えた。

そこで、また声が聞こえた。

「うるさいわね！　黙りなさい、ジェド！！」

「ホントだよ？　モト様が笑ってるんだから、殺すなら私がやるの」

今度は二人の声がしたがどちらも女の声だった。

「モト様が笑ってるんだよ？　どんなに強いんだろ？」こっちは声が高いな。

「はあ、これだからジェドとは同じ班じゃ嫌だって言ったのよ」こ

つちの人は声が大人っぽいな。

「うるせーな！ いーんだよ！ ほらっ！ 撃てー」  
ヤバイ。撃たれる。

そう思った瞬間、つい怖くて目をとじる。

銃声が耳に響く。

……あれ？

どこも……痛くな、い？

「うがアッ！！」

「くそッ！ どこにいる！」

と男達が声を荒げている。目を開け男達を見ると足や手を押さえて  
キョロキョロとなにか見回している。

……誰かに、撃たれたのか？

でも、なんで？ 誰が撃ったんだ？

「オイ……まーたやられたのかあ？ つつかえねーな」

と、ジエドと呼ばれていた男の声がある。

「フッ……もういい。帰るぞ」と続いて響く声があった。

「えっ？ なんで帰ん「うるっさいわね！ ……帰るのよ」……えー」

と言葉の途中で大人っぽい声がした。

その声で、さっきまで動かなかった車が動き出し、武装集団と共に  
遠ざかっていく。

僕は理解が追いつかずキョトンとしてしまった。

今度はここにバイクの音が近づいてくる。

見るとバイクは僕達から少し離れたところに止まった。

バイクは大きめで左側に車輪が一つの人が乗れるものがついている  
サイドカーだ。

本体には男と女が乗っていて、サイドカーには男が一人乗っている。  
サイドカーに乗っている男は銃を構えていたのであの子が撃ったん  
だろうと思う。

何だろう、この人達？

僕はそう思ったがメグムは男の子が持っているものに興味があるらしく

「えっと……あの長い感じなんだっけ？ すなっ、すない……なんだっけ？」

「スナイパー」

「おおーそれそれスナイパー！ 遠くまで狙えるんだよね」

と、ヒカルと話している。

すない、まで言ったら出るよね、普通。

バイクをもう一度見てみると後ろにのっていた女の子が降りて、こちらに来ている。

すごく焦っているようで短い距離なのに何度かこけそうになっている。

あ、こけた。

その姿を見ていて頭の中が一瞬くらっとした。

「だっ、だいじょぶですか！？」

走りながら聞かれたからか、驚いてすぐ答えられなかった。

近づいてきてわかったが、見た目は同じ年くらいだ。

顔は大人しい感じで整っている。

両手で箱をもっているが、赤い十字マークが入っているから救急箱だろう。

もしかして僕のケガを治しにきてくれたのかな？

もう痛みはないけど。全然。

「あっち人の背中なんだっけ？ がと……がとり……がとりん……なんだっけ」

「ガトリング」

「そう……そんな感じ！」

メグムは相変わらず今度は男の人が背中に背負っている銃の話をし

ている。

……だから、がとりん、まで言ったら出るよね。普通ッ。そうこうしていると女の子が僕達の目の前についた。

「大丈夫ですか!？」

また聞かれたけど……痛くは、無いんだよね……

「大丈夫、です……」

答えると女の子は僕の目を見て、顔を近づけてきて

「大丈夫!? 大丈夫なわけありません!!」

と、言ってきた。

「wowっ!」

僕は驚き、変な声を上げて後ろに倒れてしまった。不覚。

「ああ、すいません! 大丈夫ですか!？」

こっ……怖い……すごい迫力だ。

女の人はみんなこうなのかな……?

女の人との初めての出会いは怖いものになった。気がする。

「傷は大丈夫ですか？」

と、僕の体を起こそうとしてくれた。僕はちよつと怖くなって手で穴を掘り、隠れた。

「あつ、そんなに動いたら傷に悪いです……ていうか、なぜ穴を……」

女の子も僕を追って来ようとするからメグムを盾にした。

「オイッ、傷見てもええよ」とメグムが言うが、メグムも気づいているはずだ。

傷がもう塞がっていることを。

どうしてかはわからないが、傷はもう完全に塞がっている。

女の子に伝えたいが、うーん、どうも怖くて話せない。

「そうです! 傷を! 早く! 見せて下さい!」

ひっ！ やっぱりすごい迫力だ。

「ハハ、怒鳴ったりしたらダメですよ？」

バイクに乗っていた男の人がこちらに来ていた。

「あつ、すいません……」

ちよつと怖かった女の子がいきなりしほみだした。

ちよつと以上は断じて認めません。

それはそうと、スゴイ人だ。

「仲間がすいません。彼女は怪我人を見るとああなってしまうんです」

別に謝ることはないのに。

ただ、一生懸命なだけなんだし。

僕のかわりにメグムが大丈夫です、と言ってくれた。

「私の名前はシヨウタ、こちらはアヤメ、あっちにいるのがカイトです」

そう言つて頭を下げてくれた。

アヤメという女の子も続いて頭を下げてくれたが、カイトという男の子は銃を見ている。

「俺はメグムです。こっちはワタル、こっちがヒカルです」

と、メグムも頭を下げたので僕とヒカルもそれに続いた。

「私達は今みたいな奴らと戦っているんですが……色々とあなた達と話がしたいんです。少し、時間をいただけませんか？」

メグムは少し考えて、

「いいか？」

と、僕に聞いてきた。

ヒカルになんで聞かないのか、不思議に思つてヒカルを見る。

「ヒカルはお姉ちゃんのところに行つてやれよ」

そう、メグムがヒカルに言った。

ああ、そうか。なるほどね。

ヒカルが少し笑顔に見えた。

「それじゃあオイラはここでっ」

ヒカルが走る構えになった。一刻も早く逢いたいんだろう。

「明日の夜に、またここな」

夜？　なんか曖昧だな。と思ったが、ヒカルは

「おっし、わかった」

タカタ力走っていつてしまった。

メグムが僕の方を見てきたので僕は、「うん、別に大丈夫だよ？」と、言った。

メグムがOKのマークを出すと、シヨウタという人は走ってきた車に手を降り出した。

車を指を指して、「じゃあアレに乗ってくれませんか」と言われた。

「わかりました」

「わかりました……」

僕は穴から出て、メグムに続いた。

「隊長ー。来ましたよー。」

止まった車から男の人が出てきた。

隊長と呼ばれていたってことは、やっぱり本当に何かと戦っているんだ。

「ありがとう、セイヤ」

シヨウタという男の人は僕達より年上に見えるが、セイヤと呼ばれる人も年は変わらないようだ。

それにしても、メグムは年上相手に余裕が見える。

「あの……」

つくづくメグムの余裕には驚かされる。

「あのう……？」

なんでなんだろう。

「あの……！！！」

「うおっ!？」

考えていて気がつかなかったが、いつのまにかアヤメという少女が近づいていた。

また顔を近づけられて、

「車に乗ったら、ちゃんと傷見せてくださいね？」

「え、ああ、ええと、ええ？」

「……いや、傷を見せるだけだぞ……別になに怖くは……」  
メグムに正論を言われた。

「え、ああ、はい」

思わず答えてしまった。

「わかりました！ 先に乗っています。ショウタ隊長。私は車で帰ります」

「ああ。わかったよ」

と、言ってしまったていた。

「本当に悪いね。さっ、乗ってくれ」

僕はメグムの後ろから車に向かった。

何気なく自分の立っていたところをみると銃の弾があった。

一つは形がそのままだったが、もう一つは凹んでいるというよりは原形がわからないくらいにぺちゃんこだ。  
すごく気になるが、

「おーい、ワタル」

「あつ、ゴメン。今行くよ」

メグムに呼ばれたので車に急いだ。

車はさっきほど大きくはなかったがそれでも大きい方だ。  
車に乗り込もうと右足を車に乗せる。

やっぱり、あの銃弾が気になってもう一度見てみる。

弾が二つ転がって、少し動いた気がした。

うたれたお腹に手を当てると、傷が少しむず痒かった。  
僕は顔を上げ、左足も車に乗せた。

## 第五章（後書き）

ワ「さあ始まりました、ドキドキの宣伝タイム。次元を超えて！」

メ「急にテンション上げて、どうしたん？」

ワ「なんか、宣伝するらしいよ？」

メ「え、マジで？」

ヒ「急だなしかし……」

ワ「確かにね……」

紅「こんにちは」

ワ・メ・ヒ「！？」

紅「日常日記からきました、作者の紅夏です。よろしく」

ワ「あ、うん、よろしく」

メ「……作者？」

ヒ「作者……、って、確かこの世界を作ったって噂の……？」

紅「あ、違う違う。」

菊「これを作ったのは俺！」

ワ・メ・ヒ「！！？」

菊「ま、俺達の事は、下にある作者のマイページって場所から、日常日記って場所に行ったらわかると思う」

紅「あ、先走りおったな、菊田君……」

菊「そんなわけで俺達を送る、」

紅「俺が友達の皆とリアルで起きた事をかきつづるだけの小説（？）」

紅・菊「日常日記！」

紅「詳しくはweb（嘘）で」

紅「……さて、帰りますかね、リアルに」  
菊「そうだな」

ワ「……なんだったんだ……」

メ「……宣伝、か……」

ヒ「……リアルって、どこだ？」

ワ「……さあ？」

メ「……俺達も、行くか！？」

ヒ・ワ「マジで！？」

紅「……というわけで、日常日記。皆様、どうか、よろしく願います」

宣伝失礼しました。  
ちゃんちゃん。

## 第六章（前書き）

今回、ちよつとした人物の關係に本当にちよつと動きがあります。  
さて、誰でしょう。

ふふふ……

でも俺書いてないからよく分かんないや……

## 第六章

ガコン……ガコン……！

僕は今、車で移動をしている最中だ。

割れた地面を進んでいるため、揺れは激しい。

ガコン……ガコン……

というより、今僕はイスに寝かされていて、アヤメさんという少女に、あの変な奴らに撃たれたはずの場所を診<sup>み</sup>てもらっている。寝かされているせいで揺れが余計に伝わってくる。

ガコン……ガコン……

座っているだけでも充分嫌になるだろう揺れを体全体で受けているから、あまりいい気はしない。

ガコンッ！　ガコン……

……もういいんじゃないかな？

そう思つて顎<sup>あご</sup>をひいて視線を腹部の方へ向ける。

スゴイ形相で僕の腹部辺りをみている。

そこにあるはずの傷が無いのだ、気になるのだろう。

……しかし、

「……やっぱり怖い」

思わず小声でいつてしまった。

見るというよりこれは睨むといった方が絶対に正しいはずだ。間違いない。

誰かに助けを求め、周りを見る。

大きめの車の中には、僕・メグム・アヤメさん・セイヤさん。

シヨウタさんとカイトさんはバイクで帰っている。

セイヤさんは運転しているの、メグムに助けを求めるしかない。

横目でメグムを見てみる。ぼけっと、眠そうな顔をして目を擦っている。

さらによく見ると、首をうつらうつらと動かしている。本当に眠そうだ。

俗にいう、船を漕いでいる状態だった。

……たぶん寝てしまっただろう。残念、助けは出してくれないみたいだ。

突然だが、この車はトラックのようになっていて、荷台にあたる部分が割と広い。

だから皆が乗れるようになっていた。

そのために椅子は普通の車と比べて、わりと長いから僕のように横に寝られるのだ。

「……」

……僕はそろそろ起きたいんだけど……もう痛くないし。

「う、うん？」

そんなことを思っているとアヤメさんが唸りだした。

「……ワタルさんは、撃たれたんだよね……？ ……服にはこんなに血がついてるし……」

うん、僕は確かにうたれたはずだ。痛かったし、動けなかった。

意識が遠のくことさえ感じたんだから。

もう一度うたれた腹部辺りを見してみる。

みたところ、穴はへそ位しか空いていない。  
へそも穴というかは微妙だけど。

「うーん……どうして傷跡が無いんだろう？」

……それは僕が一番聞きたいよ……。  
なんて言っても自分の体なんだし。

そう考えると、なぜか車に乗る前に見た二つの弾を思いだす。

きれいな形の弾と、ぺちゃんこな形の弾。

頭にひっかかって中々外れない。  
あの弾は……何だったんだろう。

一つ考えだすと色々頭を悩ます事を思い出してきた。

……結局あの人達は何だったんだろう？

……なんであの黒い石を探してたんだろう？

……そもそも、黒い石は何だったんだろう？

そこまで考えると、突然頭がクラツとした。

そのあと猛烈な眠気が僕を襲ってきた。

やっぱり、あんな事があったんだ。自分では分からなかったけど、  
疲れていたのかも。

凹んだ車の天井を見つめると、瞼が余計に重くなった。

僕は静かに目を閉じて、ほんのわずかな時間で眠りにおちた。

.....

ガタンッ

ゴッ

「ぐうつ……！」

車が大きく揺れて頭をぶつけたのか、後頭部あたりが痛い。  
あまり長く寝た気はしない。

ぼやける視界には凹<sup>へこ</sup>んだ天井が広がっている。  
少し首を回すとメグムが寝ている姿があった。

首を元の位置に戻し、頭を動かして自分の上に目を向ける。

これは……足？

きれいな肌色で、色白な感じだった。

白魚の様、とでもいうのだろうか。

目だけ動かして、上にいく。

アヤメ……さん？

視線を下げて足をもう一度みる。

………とすると、これは……アヤメさんの、足？

「う、うわわっ！」

ゴガン！

「うごっ！」

焦って動いて椅子の上で転がり、そのまま下に落ちてしまった。  
背中を思い切りうつてしまった様で、かなり痛い。

「ひゃっ！？      だっ、だっ、大丈夫ですか？」

アヤメさんがスグにこちらのほうに寄って背中をさすってくれた。  
メグムはまだ寝ている。

すごい胆力だ。地震程度なら震度4位まで平気だろう。  
それ以降も寝ていたらもう人ではない。

「ケガは！？　ケガはしませんでしたか？」

僕はアヤメさんの顔を見て、

「あ、はい……大丈夫です。ケガとかは、してません……」  
と、曖昧な返事をした。

その返事を聞くとアヤメさんはほっとした様な、とても優しい顔になった。

その変化が激しすぎて、思わず声を上げてしまった。

「……えっ、………え？」

怒っているような顔しか見て無かったからか、不意打ちをくらった  
様な気がした。

なんだが恥ずかしくなって、ちょっと急いで体を起き上がらせた。

「……？　どうかしましたか？」

そんな顔のまま目を見つめられたので、少しドキドキして目をそらした。

「え、あ、いや……なんにも……っ」

それを言うのが精一杯で、顔をそらしたまま椅子に座った。

アヤメさんは、僕を放っていると危ないと判断したのか、僕の横に  
座りなおした。

前を向いていようとするけど、自然と横に視線がいつてしまう。

少し見て、戻って。少し見て、戻ってを繰り返していると、ふいに  
アヤメさんが、

「良く眠れましたか？」

と聞いてきた。

見ていたのがばれてたのだろうか？

とか考えたが、ひとまずは

「ハイ……一応、良く」

そう答えた。

「……そうですか。良かったです」

……顔を見ることも出来ないし、このちよつと微妙な感じ……出来れば誰か助けてほしい。

ギユキツ、グツ……グ……、という音が連続して車からなった。それからスグ、

「おーい！ ついたぞー！」

と、セイヤさんの言葉が聞こえた。

早くこの空気から抜け出したかった僕は飛び出すように走って出口に向かおうとした。

椅子から立って走ろうとした時、

「ま、まってください！」

腕を捕まれた。

そのまま引つ張られて椅子に戻される。

そしてアヤメさんが僕の前に仁王立ちした。なぜだ。

「ワタルさんは思っているより疲れていると思います！」

まだ優しい顔だったが目は真剣だった。

「だから、あまり激しい動きをしない方がいいです。走ってはダメです！」

目を見つめられて言われたため、

「はっ……ハイ！」

これしか言えなかった。

こんな前に立たれると嫌でもアヤメさんが目に入る。

ズボンはより早い救護のために動きやすい様にか膝上までしかないし、上はタンクトップだ。

肌の露出が意外と多いことに気づくと余計に目を向けられなかった。顔を下に向けて目が会わないようにしていると、

「メグム君？ おきてください、メグム君！」

アヤメさんの声が少し遠のいた。  
少しホッとしていると、

「ふあゝ、ねむ……」

と、気が抜ける声がした。

メグムが起きるとアヤメさんは車から出て

「皆さん、ついてきてください」

そう言いながら顔をこっちに向けている。

メグムが椅子から立ってトボトボといっってしまったので、僕もあとから続いた。

「ありがとゝございました」

とメグムはセイヤさんにお礼をいった。

僕もそのまま「ありがとございました」と頭をさげた。

車から出ると見た感じ研究所のようなものがあつた。

周りを見るとさっき抜けてきたであろうゲートや、ドーム型の屋根の建物が連なっていた。

「ワタルさんはこちらにきて下さい」

アヤメさんに呼ばれて、「あ、はい！ 今行きます」と返事をした。

アヤメさんが立っていたのはドーム型屋根の横にある大きな四角形の建物だった。

メグムは一緒に行かないのかな？

メグムの方に目を向ける。

メグムはいつのまにかきたシヨウタさんと何か話していた。

僕はアヤメさんが走るように足踏みをしているのが見えたので、アヤメさんの元に走った。

## 第六章（後書き）

はい。

ワタルのアヤメに対する印象が、ちょっと変わったのではないでしようか。

ついでに外見ですが……

どうでしょう。

後でこのキャラ達、皆の性格、外見などのプロフィールとか書いたほうがいんじゃない？

と、思ったりしました。

傍観者としての発言でした。

## 第七章（前書き）

わーい、新しいのが届いたー！（ガキ）  
さて、第七章です。  
今回は、どうなることやら。

## 第七章

僕がアヤメさんのところに着くと、アヤメさんは建物の扉を肩で押して開けてくれた。

扉は二つになっていて、押しても引いても開けられるタイプの両開きの扉だ。

そのまま扉を肩で止めながら、「じゃあ、入ってください」と言われたので、お礼を言い中に入った。

真四角の建物も他の建物と変わらず、灰色に銅という質素な感じだった。

ひび割れた壁がそこらじゅうに転がっていて、後は何もない。

この世界と同じく、面白さは全く見つからなかった。

さつきまで色々な事が立て続けに続き続けていて、何だか自分の世界が変わりつつあるのかと思えたが、だけど、やっぱりこの世界を抜けてはいないんだと実感させられた。

自分の心の中で芽生え始めた、見えない希望は目に見える現実打ち砕かれた。

当たり前の景色が僕をここまで傷つけてくる。と、その時。

「……？　ワタルさん、こっちです！」

と、ネガティブな思考を止めてくれる声が頭に響いた。

アヤメさんに今はとりあえず感謝したいと思った。

あのまま考えていたら少し前の自分に戻っていたかもしれない。  
それだけは、何か嫌だった。

「ワタルさん？」

もう一度名前を呼ばれたので、すっぱりと考えるのをやめて、

「すみません。今行きます」と答えた。

アヤメさんはこのフロアにある一番奥の柱の前で立っていた。  
柱は異様に大きく、少し目立っている。

アヤメさんの元に行き、なにか握っているアヤメさんの手元を見て  
みる。

よく見ると、なぜか柱に鍵穴があって、そこに鍵を入れようとして  
いるみたいだ。

荷物を持っているせいでうまく入らず、大変そうだ。

「僕がやりましょうか？」と聞くと、アヤメさんはこちらに笑いか  
け、

「すみません。ありがとうございます」

と、鍵を渡してきた。

僕は鍵を受け取り、鍵穴に入れる。

鍵はすんなりとはいかなかったが、入ってくれた。  
なるほど、大変そうだった訳が分かった。

鍵を回すと柱に線が浮き出て、線の内が動き出した。

《ただの風景》だった柱が、急に《意味を持つ物》のデザインになり、僕は腰が引けてしまった。

その線の動きは少しずつ弱まり、真ん中の辺りが長方形に凹<sup>へこ</sup>んだところで動きは止まった。

アヤメさんは特に驚くこともなく凹んだ部分の前に立っている。前に立ってから3秒くらいすると、凹んだ部分が自動ドアのように開いた。

アヤメさんはその中に入り、

「さあ、ワタルさんもどうぞ」と言ってきたので、僕は恐る恐る足を中に踏み入れた。

少し中に入り、周りを見る。

柱の中は、柱をそのままくり抜いたようになっていた。

四角くそこだけ切り抜かれたような空間で、そこそこ綺麗だ。

銅色がないと言えないが、白がベースなのが良くわかるほどだ。

アヤメさんにこれが何か聞こうとすると、その前にアヤメさんが先に話しかけてきた。

「ここはエレベーターになっているんですけど……。ただの柱のようにして隠してるんですよ」

言われたことは大体わかったが、なぜこのようにして隠しているのかが分からなかった。

「なんのために隠してるんですか？」

僕が質問すると、アヤメさんは僕と顔を合わせず、

「一応基地みたいなものですから、誰にでもわかってしまうと困る

ことがあるので……」

と呟くように言われてしまった。他にも聞こうとしていたけど、ちよっと聞けるような空気では無くなってしまった。

「動くので足元が揺れますよ。気をつけてくださいね」

アヤメさんはそう言いながら扉の横にあるボタンに手を伸ばしていた。

扉の横にはボタンが三つ、三角形に並んでいて色がついている。

上の一つは赤く、下のふたつは右側が緑で左側が青かった。

その中から、アヤメさんは下の青いボタンを押した。

ボタンを押してからすぐにエレベーターは動き出し、どうやら下がっているようだ。

それが気になり、「アヤメさん。これって……下がっているんですか？」と聞いてみる。

「実はこの上には何もありません。全部部屋は地下にあるんですよ」と答えてくれたが、とても驚いたせいによく理解ができなかった。

「あの、全部下って？ 自分たちで作ったんですか!？」

アヤメさんは僕の声に少し驚いたが、「はい……全部、皆で作ったらしいです」

と続けてくれた。

アヤメさんの言葉の最後が気になって、「らしい？」と聞いてみた。

「私がこの場所にきた時はもう出来てたんです……。だから話を聞いただけなんですよ」

なぜか申し訳なさそうに答えてくれた。

なんだかアヤメさんに悪いことをしたような気がして、

「なんか……ごめんなさい」と、思わず謝ってしまった。

「え、あ、大丈夫ですよ。謝るような事でもありませんし……」  
確かに謝るのは変かもしれないけど。

謝っても悪いことではないんじゃないかな？ とか考えているとエレベーターが急に止まった。

いきなり揺れて驚いたが、

「きゃっ！！」

と叫んで（悲鳴を上げて？）膝から崩れたアヤメさんを反射的に支えたので、逆にこっちの方が驚いた。

僕の腕に体を預けていたアヤメさんは

「あっ！ ご、ごめんなさいっ」

といって後ろに引いていったが、すぐに壁に頭をぶつけ、少し涙目で頭の後ろをさすっていた。

こうみるとアヤメさんは天然な人っぽく見える。こけたり頭ぶついたり。

うん、まあ、そこは女性として怖くない部分がみれて嬉しいかぎりだ。

「えーと……大丈夫ですか？」と僕が聞くと、「は……はい、大丈夫です。えと、こちらに……」

そして、アヤメさんが先に行こうとして、閉まっていた扉にぶつかった。

扉が開いていないことは見ればわかったのに……。慌てていたのか、相当焦っていたことがわかった。

アヤメさんはぶつかった場所を右手でさすりながら、左手で青いボタンをもう一度押した。

ボタンが押されると、閉まっていた扉が少しづつ開いてくる。

僕はその隙間から漏れ出る光に、目を殺<sup>や</sup>られた。

エレベーターの中は電気がついていたが、それとは大きく違う鮮やかな光だった。

もっと、白く、きれいで、神々しい光だった。

強すぎる光に閉じた瞼<sup>まぶた</sup>がようやく慣れた所で目を開けた。

目を開けると、そこにこの世界ではありえない様な光景があった。

そこらじゅう、傷のない壁が全くくすみのない白で広がっている。

それだけじゃなく、床にはタイルが敷き詰められていた。

アヤメさんが歩くと共に、綺麗な音がしている。

カツツ、カツツと小気味のいい音が耳に入ってくる。

僕はこの空間に感動した。

いままで白の壁というもののさえしつかりと見たことさえなかったのに、今日は正に純白<sup>くはん</sup>を見れた。

足音を出そうとしても、歩くと壊れる床の上しか歩いてこなかったのに、今はどうしても音になる、綺麗な床の上に僕は立っている。確か、この床はリノリウム、とか呼んだはずだ。

少し前の世界は、これが普通だったのかもしれない。だが、今の世界では正に奇跡だった。

とても驚いて、くるくると回りながら廊下を見ていると、アヤメさんに呼ばれた。

僕が嬉しがって壁とか床を大はしゃぎで見ている間に、アヤメさんはいつの間にか先に行っていた様だ。

少し急いでエレベーターをでると左と右に長く廊下がつづいている。いくつか扉があつたが、アヤメさんは左の廊下の1番奥にある扉の前で足を止めて、

「あ、それでは、この部屋に入って下さい」と言つて、先に部屋に入つていつてしまった。

僕は浮かれてキョロキョロしながらも足を進めて扉の前についた。僕は扉のドアノブに手をかけようとして、自分の手が汚れていることに気づいた。

なんだか汚い手で触るのがとても悪い事のような気がして、ズボンで手を拭く。

もう一度自分の手を確認するが、結局あまり綺麗とは言えなかった。そんな訳で、人差し指と親指だけでドアノブに触れた。

指先に力を入れて少し開け、あとは比較的普通な（おせじにも綺麗ではない）肩でぐいと押した。

中に入るとそこにはファイルが散らばつて置かれた机と、ホワイトボードしかなかった。

机には白衣の女性が伏せていて、左手にはピンを持っている。

……ちよつとがっかり。

「あゝ！ 先生！ 何やつてるんですか！？ また飲みながら寝たんですか!？」

アヤメさんが初めて会った時と同じ様になった。

やっぱりスゴイ迫力だ。

「あれだけ飲んじゃダメッていったじゃないですか！ も、先生、今回はどこにお酒を隠してたんですか！？」

ああなるとアヤメさんはとりあえず色々聞いてくることが分かった。こうやって僕は色々なことを分かって来ているけど、これが外の世界に飛び出したからなのか、実感は湧かなかった。

「ああ、ホントにも」

アヤメさんはまだちよつとした文句と質問を繰り返している。

しかし、さすがに女性が気になって来て、

「あの……アヤメさん？ どうしたんですか？」と聞いてみた。

アヤメさんは僕を見て、突然顔を赤くしてあたふたしだした。

「え、ハイ！？ ……えーと、あの……これは……いや、この人は……」

そこでアヤメさんは一度俯いて、女性の肩に手をかけ、少し揺らしながら

「……こっ、……この人は私達医務班の班長なんですよ……」

完全に苦笑いで言っている。

アヤメさんが無理して頑張っているのが分かったから、そこはとりあえずツツコまない。だが、僕はまず医務班というものがあるということを知らなかった。

しかし、文字の感じで理解はできたから、自分の中ではいいことにした。

アヤメさんはそのままずっと女性のことを揺らしているから、少し落ちつくのを待つことにする。

アヤメさんは思っていたより早く元に戻った。

顔の赤さは引いたし肩を揺らす手も止まった。

そうになると結局話が切れてしまって、気まずい空気が流れる。  
こんな時は、

「あの！ 僕はなんでここに連れて来られたんですか？」  
メグム直伝、《テンションを上げて話す》を使おう。

ちなみに、これは最初から気になっていた疑問だ。

「えーと、それは私じゃなくて、この先生が知ってるんですよ」  
アヤメさんはまた肩を掴み直している。

「あの、私はショウタさんにワタルさんを医務班に連れて行くよう、頼まれただけなんです……」

なるほど、じゃあ僕はこの伏せている女性に聞くしかない。ここに連れて来られた理由を。

「だから……あの！ 先生！ ホントに起きてください！ せーん  
くせーいー！」

そう言つてアヤメさんが叫ぶと、ついに女性はむくつと顔を上げた。  
女性は頭を掻き、起きてすぐの目をさらに細めたまま、

「ん、あ？ どうしたのアヤメ？ そんなデカイ声出してえ」

その女性の喋り方はすこし男っぽかった。

「どうしたじゃありませんよ……。ワタルさんを連れてきたんですよ。」

アヤメさんが僕の名前を出すと、女性は僕の方を見てきた。僕は頭を下げて女性の方を向いた。

「あー、うん。君がワタルくんね？」

女性はそれだけ言って机に散らばったファイルの一つをパラパラとめくり始めた。

「先生……またこんな汚したんですか……もう……」

アヤメさんが肩を落としている。

いつも何があるのかちよつと気になる。

「ねー、アヤメ。今日はこの検査よね？」

女性はアヤメさんにページを見せて、目線は僕を見てきた。

「私もついさっき聞かされたんだけどさ。君、ここで検査を受けてくれない？」

突然そう聞いてきた。

僕は、ここの説明以外他に何も聞かされていなかったから「あの・・何の検査ですか？」

と、当然の質問を試してみるが、「まっ。そういう事は検査の結果の時に話すから。ねっ？ いいわよね？」

その言葉に呆然として、「え」  
ぐらいしか言えなかった。  
そして、

「い・い・わ・よ・ね？」

という営業スマイルと共に言われた次の言葉に、

「はい、お願いします」

つい押し切られてしまった。

……僕はやっぱり女の人に弱いのかもしれないと思ってしまつ。

女の人みんなこうなのか？ それはなんか嫌だ、という考えは当然強くなっていく。

「はいありがとう。私の名前はレイナ。検査、よろしくね？」

やっと名前がわかったところなのに、そのまま検査になった。  
初めは血を取るといったが、僕は注射が苦手だったから断った。  
しかし、あのスマイルを近距離で喰らってしまい、（なにか黒いオ  
ーラが見えるのは僕の気のせいだろう）で、暴れるわけにもいかな  
いので結局血を取られてしまった。

この後はどうやら特殊な機械を使うらしい。

「大丈夫、台にねてもらっただけだから、ね？」

と、言われたがまずそんな機械が見当たらない。

何度見渡してもホワイトボードと机しかない。

レイナさんは椅子に座ったまま机の引き出しを開けて何かを探しているようだ。

僕は何も出来ないままただ白い壁を見つめているしかなかった。

「おっ！ あった！」

レイナさんはそいいながら机からだした黒くて四角いものを僕の見ていた壁に向けた。

カチッ！

レイナさんが真ん中にあったボタンを押すと、なにやらただ白いだけの壁が動き、その中から銀色の扉が出てきた。

……ここはカラクリだらけなのか？

エレベーターといいこの場所といい……。

思わず口が開いていたようで、「口が開いてるわよ」とレイナさんにツッコまれてしまった。

「あなたはもうセイヤに会った？ 会ったなら多分分かるだろうけど。これは彼が作ったのよ？」

僕は急に言われたことと、純粋な驚きから「すっ………すごいですね」としか言えなかった。

「ちなみに、ここにあるこういう機械は、全部そつなの。床から何まで、ね」

レイナさんはフラフラと歩きながら扉の方にいった。  
レイナさんがつくと扉はスムーズに開いた。

へえ……セイヤさんはホントにすごいな。

「……先生、フラフラしてるじゃないですか……」

アヤメさんがレイナさんを心配なのが良く伝わってきた。

「さっ！　ここに寝て」

ベットをバシバシ叩いて言っているが、そのベットには曲線状にに曲がった物が両サイドについていて、少し怖かった。

「お願いします」

近くにいたアヤメさんに頼まれたので、ベットに向かった。

僕がベットに寝ようとする時には、アヤメさんはさっき取った僕の血の容器を機械に差し込んでいた。

レイナさんはベットの両サイドのものから出たコードと繋がっているパソコンの前に座っている。

僕がベットに寝ると、「中では動かないでね？」　と言ってパソコンで操作している。

「始めるわよ」

僕が返事をする、レイナさんがパソコンのキーを押す。

キーが押されると同時に両サイドのものが起き上がり、僕の目の前でつながった。それがつながると、ベットは上の部分がないカプセ

ル状になり、光り始めた。

柔らかな光は段々広がっていき、僕を包みこんだかと思った瞬間、するりと光が消えた。

そのままカプセルは開き、元の位置に戻った。

僕が体を起き上げると、パソコンの横にある機械から、何か紙が出てきた。

レイナさんは紙に手を出しながら、「少し待ってて」

と言ってきたので、これ以上靴をはいたままベットに乗るのは嫌だったので、ベットからいったん降りて、ベットに腰掛けていた。

ちなみにベットに乗る前に確認をとったが、靴のままでいいと言われた。

レイナさんは紙を見て

「……ビンゴ……ね」

そう小声で言った気がした。

良く聞こえなかったので本当に言ったかどうかは分からない。

「アヤメ。これをシヨウタに渡してきて」

と言って持っていた紙をアヤメさんに渡している。

「シヨウタじゃなくて隊長です」

アヤメさんはそう言ってから部屋から出ていってしまった。

レイナさんはアヤメさんが出て行くのを見送ってから、「さっ、さ

っきのアレの説明を始めようか」と言ってきた。

僕は何の検査か気になっていたので、「お願いします」と話に耳を傾ける。

「最初に聞いておくけど。……本当に撃たれたんだよね？」

僕は確かに撃たれたはずだ。

自分のお腹をさすってから「ハイッ」と答えた。

レイナさんは僕の言葉に少し笑って、説明を始めてくれた。

## 第七章（後書き）

さあ、つぎはどうなるやら！

何を隠そつ、期待しているのは読者さんだけじゃなかったりします。

## 第八章（前書き）

うおお、早く投稿しないと！

なぜ許された時間がたった十分なんだ！

では、頑張れ菊田君！

応援してるぞ！

## 第八章

｝sideメグ｝

俺はトラックの中では色々あったためか非常に眠かったため、よくトラックの中であつた出来事を覚えていない。

割れた地面を進むための揺れは、俺にはまるで子供をあやす母の様なぬくもりがあつて心地よかった。

いつかは知らないけど、いつの間にかぐっすりと寝ていた。

アヤメって人に起こされてトラックから出たけど、眠気は完全には無くならなかった。

今もフラフラするし。

と、いうよりここは何だろう？

……基地みたいなものかな？

「……なんか面白いものありそう」

突然さつき思つた事だけど、とても何かありそうだ。

色々ここが見たいと思つて周りを見てみると、さつき通つたであろうゲートに普通のバイクの大きさに比べずいぶん大きめのバイクが見えた。

確かシヨウタさん、と、カイトって人がバイクのままこっちに向かつてきている。

……あゝ。まだ眠い……

というか現在進行形でねぼけている。

あれ？

こっちというより俺の方に向かってきている気がする。

どうやら俺の読みはあっていたようで、バイクはオレの目の前に止まった。

シヨウタさんはバイクから降り、カイトにヘルメットとグローブを渡した後、

「すまないね。これとバイクを元に戻しておいてくれないか？」

そうカイトに言った。

すると、

「構いませんよ」

と、聞き方によっては突き放す様な冷静で機械的な響きが言葉の中に含まれていたが、俺の経験上別に突き放したいとかそんな事はな  
いと思う。

なんだかアイツも、最初に会った時のワタルみたいだな。

少しカイトのことが知りたくなった。

「うゝん、後で話を聞いてみようかな」

そう俺が独り言を言っていると、  
「うん？ 何か言ったかい？」  
と、シヨウタさんに聞かれてしまった。

「いんえ、なにも」

オレはねぼけた声でやんわりと答えた。

「そうか。それじゃあ、僕と一緒に僕達の基地について来てくれるかい？   ワタル君とは別になってしまっただけだね」

シヨウタさんは妙に笑っている。  
しかし、悪意は微塵も感じられなかった。

「はい、わかりました」

なんて答えてみるけど、実を言うと意味はよくわからなかった。

まあ、とにかくシヨウタさんについて行けばいいということはわかったからそれで充分だと思う。

その後、シヨウタさんが向かったのは真ん中の建物だった。  
俺はいまだに覚醒しない脳と、ボヤけたままの視線でふらつきながらシヨウタさんの後を追う。

建物の中は見慣れたような感じで、別に今までと代わり映えはしなかった。

それでも今の眠気に完敗しそうな状況の俺には小さいガレキも足をとられるには充分で、仕方なく下を見て歩いていた。

ぽふっ

下に夢中でシヨウタさんが止まったことに気付かず、頭をぶつけてしまった。

「あつ………すいません」

「いやいや、大丈夫だよ。そんな事より、さあ、これに乗ってくれ」  
俺が謝ったのに対し、笑顔で許してくれた。

いやゝ、つくづく良い人だな、と思う。

そんなことを考えてシヨウタさんが言った【これ】に目を向ける。

「えれ……ベーター!？」

「そうだよ。エレベーターは……今では珍しいよね」

シヨウタさんはまた笑って言っているが、これはものすごいことだ。  
今エレベーターを見ようと思ってもそう見える物じゃない。

ましてや今でも光を出して動いているなんてほとんど奇跡だった。  
ワタルやヒカルにも見せてあげたいな。

「これは……一体どうしたんですか？」

思わず聞いてしまった。

「これは……仲間が作ったんだよ。さあ、乗ってくれ!」

なんだかスムーズに話を切り上げられた気がしたが、今は何より寝

ばけていたから後で聞こうと思った。

思っていたよりココは色々ありそうだ。

エレベーターに乗るとシヨウタさんは色分けされたボタンの中で、緑のボタンを押した。

エレベーターは一瞬フワリと浮くような感じがして、下に下がるのがわかった。

エレベーターを見回すと、マイク付きのカメラのような物を見つけた。

ココを誰かが見ているんだろう。

……つまり、何かを監視しないといけない事でもあるのだろうか。しかし、さっきシヨウタさんは“僕達の基地”と言っていた。

つまり、このカメラは“もしも”仲間以外がこの基地とやらに入つて来た場合に、その標的をマークしたり、的確にその標的がいる場所を知らせる役割があるのだろう。

こんな監視カメラみたいな物もありみた事がなかった俺は、改めてこの基地のすごさを痛感した。

「エレベーターを出るとすぐ二手に別れる廊下なんだ。そこについたら、左側に曲がって行くんだ。あとちよつと、我慢してくれ」

「ハイ。わかりました」

答えてから少したつと、エレベーターが止まった。

ドアが開くと、そこも代わり映えのしないところだった。

シヨウタさんが先に歩いていったので、やっぱり後に続いた。

少しのまっすぐな廊下のあと、左に曲がる。

いくつかトビラがあったが、シヨウタさんはそのトビラに見向きもせず進む。

結局廊下の最後にあるトビラに手をかけた。  
ノックを三回。

「シヨウタなんだが大丈夫かい？」

と、シヨウタさんがトビラ越しに声をかけると、中から「入ってきて下さい」

という声が聞こえた。

シヨウタさんがドアノブを引いて中に入る。  
俺もシヨウタさんに続いて中に入った。

## 第八章（後書き）

せーふ！

よかった……

では、菊田君が次のアレを書くか、泣ける話を書くかは分かりませんが、

期待して待ちましようかね。  
ではっ！

## 第九章（前書き）

キターー！

さて、何がおきるのやら。

始まります！ ……俺にとっては編集が……

## 第九章

トビラの先の部屋は広がった。

端から端まで50mくらいは十分にある。

本当はもっと広いんだろうけど、あまりに……部屋にあふれかえる物が多すぎた。

「悪いね。片付いてなくて」

シヨウタさんにそう言われて、

「いやっ全然……あ、部屋、広いですね」

そう返したけど、もしかしたら顔が引き攣<sup>つ</sup>っていたかもしれない。

「すみませんね。片付いてなくて」

その声はトビラ越しに聞いたものと同じ物だった。

初めから中にいたその男の人は、多分シヨウタさんより若い人だと思ふ。

髪を両方ともボサツとはねさせて、汚れた白衣をきている。

顔はこちらに向けずに、さっきから資料に目を通してている。

「はは、冗談だよ。コースケ」

シヨウタさんはその男の人をコースケと呼んだ。

「まっ、汚いのは嘘ではないですし。そんなことより……見ましたよ、資料」

そう言いながら顔をこっちに向けて、資料をピラピラと振っている。顔たちは良く鼻筋が通っていて、かつ頭が良い様にしか見えなかった。

俗にいう、インテリという言葉が良く似合う、と思った。

「その話の前に、自己紹介くらいしたらどうだい？」

「あ、そうですね。ボクの名前はコースケ。どうぞヨロシク」

いきなり自己紹介をされて、返す言葉を考えていなかった。

しかし、言われっぱなしも何か嫌だし、自己紹介を返さないなんていうのはどうかと思うので、

出来るだけ簡単に説明することにした。

「俺、じゃない……僕の名前はメグムです。よろしく」

途中で噛んだ上に、妙に緩い自己紹介になってしまった。

……自己紹介的にはわりと酷い出来に入るだろう。

「別に俺でよかったノニ？」

と、小声でコースケさんに言われてしまった。

「自己紹介も済んだし、話に入ろうか」

そう言つてシヨウタさんは物の中から二つの椅子を引っ張り出して、その一つを俺に座れるようにしてくれた。

「コースケは自己紹介のときに言わなかったが、ここは研究班。そしてコースケはこのリーダーだ」

「は、はぁ……？」

なんの研究をしているか聞きたいが、今は止めておこう。  
座り終わるとコースケさんが、

「現場の状況からしておかしいことだらけだね。でも隊長のいう通りカイトの発言が加わつて一つの可能性がでてくるのサ」

俺の前で話すつてことはコースケさんが言っている現場とはシヨウタさんと出会つた場所だろう。

でも他のことはわからない。

カイトは何て言つたんだ？ おかしいってワタルがか？ 悩んでいるとシヨウタさんが教えてくれた。

「すまないね。これはさっきの場所での出来事の話をしているんだ」

「それはわかつたんですけど……。おかしいって？」

俺が聞くとシヨウタさんは、

「そうか。……なら、コースケ。出来るだけ、最初から説明してくれ」

とコースケさんに話をふった。

「うっす、わかりまシタ」

そう言つて説明を始めてくれた。

「まず、君も……おかしいって思うこと、あつたよネ。君と一緒にいた子の事とか、サ」

一緒にいた子……ああ、ワタルが。

「ワタルの事ですか？」

「ふむ、ワタル君というのか。まあそのワタル君が撃たれた事は本当なのかナ？」

「はい……絶対に、撃たれました。ワタルは、俺を庇<sup>かば</sup>つて……。倒れたワタルを……抱えた時の、冷たく、凍えて、落ちるような……ッ」

思い出すと、余計に嫌だった。

なんだか、脳の底にこべり付くみたいに、記憶がそこにあつて。

それに、ワタルのあのときの言葉が頭に響いて。

手にはわずかに消えゆく様な感触が戻るし。

俺の自分勝手にワタルは……ッ！

そのとき、コースケさんの口から一つだけ、ポツリと言葉が放たれた。

「…………でも、彼は無傷だった」

…………無傷？

確かに、ワタルの傷は治っていた。

それは本当。

だけど！

決して無傷なんかじゃない。

ワタルは、確かにあの時、死にかけていた。

何を隠そう、俺が一番傍にいて見ていたんだ。

「無傷なんかじゃないですよ…………！　ワタルは、俺のことを守るために！　俺を…………俺を庇って撃たれたんですから！！」

勿論、悔しさだっただけ残っている。

今更どうにもならなくなつて、自分を思い切り殴つてやりたくなる。

「でも、君も見たんだろ、傷が無かつたことをサ。確かに服の紅あかはこんな世界なら色々な解釈ができる。そう考えたら撃つた弾が彼にあつたかもわからないじゃない力？」

……何、言つてんだ？

……この、人は……！

ふぎけんのは、止めてくれ！

「ワタルは……っ！　ワタルは、撃たれました！！」

「例えば、君の見間違いとか」

コイツ……見間違えるわけないだろ！？

俺は思わず席を立つてしまった。一步、前に進む。

ワタルのやつた事を否定されるのが、何より許せなかった。

「ワタルは俺に当たるはずの弾を、自分から当たりについてたんです！　初めて、自分から！　自分の気持ちで……一步踏み出したんですよ！　それが……一体何の気持ちかもわかんないのに！　踏み出したんだ！　例え……それが間違つた一步だとしても……！」

踏み出した足にも、鉄をも砕くほどに力が入っていたため、少し前にでていたかもしれない。

そんなの、全く関係なかった。

今は、ただ、この言葉を。

それだけだった。

「ワタルが自分の足を動かして、俺を庇って撃たれた！　これは…  
…事実なんだ！！　誰にも変えられない真実なんだよ！！　ワタル  
が初めて命を懸けて踏み出した一步を！！　俺は誰にも…ッ！  
否定はさせない！！」

言いたいことを言い切ると、その場が完全に無言になってしまった。  
沈黙に包まれた状況で、俺は急速に冷静さを取り戻していった。

……良く考えると、もっと上手い言い方があったはずだ。

何も、怒鳴って言わなくても、良かったのかも。

「……悪かった。別に怒らせるつもりじゃなかったんだ」

そう謝られると、余計に自分が悪い気がする。

「いきなり……、すいません」

恥ずかしさもあって、頭を掻こうと右手を上げた。

顔の近くに來た右手が、グツと握られている事に気づく。

自分では気付かなかったけど、俺は両手を硬く握っていた。

硬く握り締めた右手を開く。

目に見える程かいた汗が、手の間接に流れている。

ワタルの顔が、手に浮かんだ気がした。

「……続きをいいカナ？」

コースケさんに聞かれて、手を見るのを止める。

「ハイッ。続きをお願いします」

答えた時に気づいたけど、ショウタさんは黙ってこっちを見ていた。気のせいかもしれないが、少し笑っているように見えた。

「ワタル君が撃たれたのなら、何故か傷が治ったという事になるのかな？」

「治ったんだと……思います」

変な話だけど、実際に治っていた。

「そうか……。なら、次の話をしようカ」

「えっ？ 待つてください！ まだ終わって……」

身を乗り出しそうになった俺の肩を、スッとシヨウタさんが掴んだ。

「すまないが……話を聞いてやってくれ」

俺はシヨウタさんにそう言われて、何も言わずに座り直した。  
さつきから上手く進んでくれない話に少し嫌になる。

それでも何か分かるなら、話を聞こうと思った。

「ワタル君を撃った奴らがいたね。あいつらが動く時には理由があるんだ」

「理由？ あいつらはいつも今日みたいな事をしてるんですか？」

「いや、いつも今日みたいに派手にやっている訳ではないよ」

シヨウタさんが横から答えてくれた。

「あんな派手に動くのは……、隊員集めかな？」

……隊員集め？ 違う。

あいつらは黒い石を探していたはずだ。

……そう考えると、シヨウタさんも何のために動いているのかは分からないのか。

「隊員集めとは。何か……大きな事でも起こすつもりですかネ？」

「どうだろうか？ そんな事にならなければいいが……」

なにか、さつきから違う事を話している気がする。

「違いますよ。あいつらは黒い石を探していたんです」

つい、話に割り込むように言ってしまった。

「「え？」」

二人はこっちを信じられない物を見るような目でこっちを見てきた。

「どつ……どうしたんですか？」

「、それは本当かい？」

ショウタさんが息を飲んだあと、一瞬置いて聞いてきた。

「本当ですよ。俺達があいつらの所に持って行っただからです」

ショウタさんの目つきが変わって、睨まれるような感覚が俺に刺さる。

「……何故、そんなことをしたんだい？」

「あいつらがその黒い石を見つけるために、あの辺りを爆発させるって言ったからです」

睨むようなショウタさんの目が、スッと暗くなるのがわかった。

「クソッ……!! あいつら!!」

シヨウタさんが初めて、喰らい付くように、そして吐き捨てるように言葉をはいた。

「ということはあいつらが手に入れたんですネ……」

コースケさんが諦める様に言った。

「手に入っていないと思います。あいつらが黒い石を手に入れても、結局爆発することに俺達が気づいたから渡さなかったんです」

俺がそう言つとシヨウタさんが顔を上げて、

「じゃあその石はまだあそこにあるんだね？」

と聞いてきた。

「ハイ……たぶん」

俺は投げてから石を見てない。

ハッキリとは言えなかったので、曖昧に返した。

「コースケ、私はメグム君とあの場所に戻る！ 他の皆への報告を頼む！ メグム君！ 一緒に来てくれ！！」

「待つてくださイ！」

飛び出しそうなシヨウタさんにコースケさんの言葉が届いた。

「なんだ！？」

シヨウタさんの声から焦っているのが伝わってくる。

「メグム君。君は多分って言ったね？ 何で多分なんだイ？」

コースケさんが俺に疑問をぶつけてきた。

「その……ワタルが撃たれた時ム力ついて。その石をおもいつきり地面に叩きつけたんです。そしたらその後探しても石がどこにも見当たらず」

コースケさんはシヨウタさんではなく俺に話をしてきた。

「もう一つ質問。その石にワタル君が触れた可能性ハ？」

ワタル？ 何で今ワタルの事を話すんだ？

「ワタルですか？」

「そう、ワタル君ダ」

そこでさっきまでそわそわしていたシヨウタさんが気づいたように、

「コースケ、もしかして」

とコースケさんに話しかけた。

コースケさんとシヨウタさんが、目を合わせるのがわかった。

何かを確信するような、しかし疑問の残る、そんな意味合いがその瞳から受け取れる。

俺はそんなことより答えないと。

そう思つて、「触れた可能性はあると思います」と短絡的に答えた。実際叩きつけた所はワタルから近かつたし、確かにワタルは触れたかもしれない。

その答えを出すとコースケさんは、

「ワタル君の傷が治つた理由がわかつたかもしれない。話を続けるよ」

と言つた。

シヨウタさんもイスに座っている。

俺はワタルが治つた理由が氣になつて、

「コースケさん！ 早く話して下さい！」

とコースケさんを急<sup>せ</sup>かした。

不意に頭の中で、血だらけになりながら石に触れていたワタルが浮かんだ。

見てもいないのに鮮明に浮かぶ、ワタルの表情が心に刺さるようだった。

## 第九章（後書き）

さて、次をお楽しみに！

次号を待て！

t o b e カムテュル！。

……なんか嫌な言い方になってしまった……

では、次で逢いましょう。

## 第十章（前書き）

今回は早い！

頑張ったな菊田君！

ちなみに今回は菊田君によると、

「わりと色々変わるかも知れない回」

だそうです。

さて、どうなるのやら……

## 第十章

「まずあの黒い石の話をしようか」

コースケさんが口を開く。

「それが……ワタルと、関係あるんですか？」

あの黒い石はたまたま俺達が運んで来た物だったはずだ。そんな物がワタルと関係があるのか？

「ああ。これはもしかしたらワタル君に……直接的に関係してくるのかもしれない」

「直接、的に……？」

じゃあ偶然持ってきた石がワタルに何か関係したのか？  
だったら、ワタルとどんな関係が……？

関係があるとわかると、なぜだか嫌な気しかなかった。  
冷や汗か、俺の背中に服の端が張り付く。

仮にもワタルを撃った奴らが探していた物だ。

俺は、ワタルとそんな石とは関係があつてほしくは、なかった。  
あると、思いたく無かった。

「それは……ワタルの傷と、何か関係あるんですか？」

聞く。

あるいは、ありえないと思っていたからこそだった。  
しかし、その希望は、

「僕はそうじゃないかと睨んでル」

一瞬でぼろぼろと崩れていった。

嫌だ、と思った。

よりもよって、ワタルの傷と……

なら、多分傷を治したのもあの石なんだろう。

いや、多分じゃない。

あんな、一瞬で傷を治すなんてこと普通じゃできない。

つまり、ワタルの、もしくはあの石の理解できないような力が働いたんだろう。

ありえないと思う。

しかし、現実で起きた事ならば疑う事も出来ない。  
その得体の知れない虚無感が、心の中にもやもやと巣食う。

良く見ると、コースケさんの目つきがさっきとは違う。

シヨウタさんに至っては落ち着かずに、さっきからずっと動いている。

たぶん本人は無意識だろうけど。

確信を得るため、俺はコースケさんに話を聞く。

「ワタルの傷……あの傷を治したのも、その石なんですか？ もしくは、ワタルが？」

「僕のこの考えが正しければ、傷を治したのは間違いなく石だね。それだけじゃなく、カイトが言ったことにも説明がつくんだ」

俺はまだカイトがなんて言っただかは知らない。

でも、たぶんありえないような事なんだろう。

あの石の事がなんだか分からない限り、結局他の事は何も分からないみたいだ。

つまり、

「石の事を教えて下さい」

ワタルに起きたことを知りたい俺には、この質問しか残されていないみたいだ。

なんだか、ワタルまでの距離がいきなり遠くに離れてしまった気がした。

俺はワタルの側で、ワタルに起きた事を全て見てきた。そう思っていたのに、

今じゃ自分の目の前にいる二人にさえ、かなわない。

いきなり届かないとわかった距離は、あまりに遠く、苦しかった。

「はぁ……、クソっ」

ポツリと呟く。

頭を掻きながらついた溜息なら、どこまでも届きそうな気がした。

「じゃあ、今から説明をするヨ」

「……お願いします」

「最初に、あの石は地球の物じゃない」

と、いきなり突拍子もない事をいわれた。

「はあ」

俺はその言葉に驚き、思わず言葉を飲み込むような返事をしてしまった。

「君も知っているだろう。世界がこんなことになってしまった理由を」

あれ？　もしかして危ない物じゃないよな。

「あれは……」

この考えが外れてくれるとどれほど楽か。  
しかし、現実には時に厳しい。

「宇宙からの落し物。こんな世界になってしまった理由とされている物なんだ」

……完全に危ない物だ。

俺の予想は大当たりだった。

……軽く、泣けてくるくらいに。

「世界が風化を始めた時に、その落下物は調べられたんだヨ」

なら、その石がなんであんな所に落ちてるんだ？

「でもその時落下した場所にあった石はその一つだけだったんだ」

いや、探してくれよ……

「探すことも考えられたが、どちらかというと石を調べることには力を入れられたんだ」

だから、こんなことになったのか。

だけど、それならせめてこの世界になってしまった理由はわかったのか？

……こんな世界に、なってしまった理由が。

「だが、結果は最悪。石も見つからずに、未だこんな世界になった理由はわからない」

結局わからなかったのか。本当に最悪じゃないか。

……しかし、今聞いた限りじゃワタルの事と関係があるようには聞こえなかった。

「それで……ワタルとの関係は？」

「それは最近わかったものと関係してくるんだが……」

コースケさんはそう言いながら資料をあさり始めた。  
資料の中からファイルを取り出しページをめくって、

「これなんだけド」

と、グラフのようなものを見せてきた。

グラフは綺麗だった。

綺麗なくらい変化がない。

グラフは折れ線グラフと呼ばれる形だった。

これなら他のものと比較しやすいが、正直これじゃあ意味がない。  
グラフは途中で切れていて、次のページに繋がっているようだ。

「これは、その石と、ある液体との反応を調べたものをグラフにしたんだヨ」

「あー、でも綺麗なくらい平坦ですね」

「いや、本当に見てほしいのはこの続きなんだヨ」

そのままコースケさんは  
ページを送った。

「あ……」

一点だけ他から飛び出ているところがある。

飛び出ていると言っても普通のグラフで言ったら大した事は無い位だ。

それでもこのグラフで見ると、異様に存在感を放っている。何という液体か確かめようと、点の下を見ていく。

「血液……」

「そうなんだヨ。他のどの液体にも反応はしなかったんだが、なぜか血液だけには反応したんだ」

なんで、血液なんだ？

「なぜ血液なのかはわかっていないんだ。それに、完璧に人の血液にしか反応を示さない」

でも、これでわかった。

なんでコースケさんが血のついた手でワタルが石に触れたかを聞いた理由が。

コースケさんは、石に血が触れたら反応を起こすことを知っていたからだ。

「そして、ここからワタル君についてダ」

「はい！ つまり、あの時にワタルが血のついた手で、その石を触ったってことですよね」

「確かにそうなんだ。だけど……」

そこでコースケさんは一拍おいたけど、俺には理由がわからなかった。

「実験で起きた反応にあんな物はないんだ！　今まで反応を確認できたのは専用の機械を使って、やっと気づくことの出来る程度の物なんだ」

「……………えっ？」

じゃあ、…………ワタルの、アレは何なんだ？

「僕達が調べてきた石の力が、ワタル君を通してわかるかも知れない」

その声は、俺にはあまり聞こえなかった。  
唯一つ、

おい、ワタル…………お前は、一体何をしたんだ…………？

その疑問が、心を取り巻いていた。

## 第十章（後書き）

なるほど……

ここからなにか変化が、というのはそういうことだったんですね。

さて、どうなることやら……

では！

## 第十一章（前書き）

今回、色々あって投稿が遅れる、との報告がありました。  
菊田君に代わって私が、謝辞を送らせていただきます。

すいませんでしたああああー！！！！

## 第十一章

ワタルには普通じゃない何かがあることはわかった。

今まで起きたことを整理すると、

ワタルは血のついた手で石に触れた可能性が高い。

その石は宇宙からの落下物である。

石には血に反応するようになっていて、それには疑惑つき。

ワタルは普通の反応よりはるかに高い反応を起こした。

石によりワタルの傷がふさがり痛みが消えた。

………ッあー!!

やっぱり、どう考えたって最後の一つが分からない。

俺は自分に対するイライラで、頭を掻き<sup>か</sup>毟<sup>むし</sup>った。

いくら、宇宙という広大な【未知】からの石だからっておかしい。

普通に考えたら変だってわかるし、

それでも、それしか説明ができないことだってわかる。

頭の混乱をどこかに放り投げたくなるのは、もう仕方ないんじゃないのか？

「……大丈夫かい？」

「いや、はい……大丈夫です」

完全に自分の世界に入って考えてしまっていた。

コースケさんの声がなかったら、そのまま深い奥のところまで考えすぎて、もう嫌になってたんだろうな。

もう少し嫌になってるんだけど、そこはまあ置いておく。

「……無いんですか？」

「何がだい？」

ああ、ダメで元々だ。

素直に聞いてみるしかない。

「ワタルの事、今ワタルに起きてる事を、全部、全て知れる方法とが無いんですか？」

これさえあれば、全部どうにかなる気がするんだけど。

「まあ、方法はあるヨ」

……あるのか！？

じゃあ、一体どうやって？

「方法って！ 方法って……一体なんですか！？」

「簡単サ。ワタル君の血をあの石につけるんだヨ」

ああ……確かにその通りだ。

「でっ、でも！ あの石は？ あの石はあるんですか！？」

「それが無いのが、唯一のポイントなんだ」

それを聞いて俺は苦い顔をし、地面を見つめて黙ってしまった。  
ぐつと拳こぶしを握にぎる。

分からなかった。

それが、悔しい。

そんな俺を見てコースケさんも黙ってしまった。

少しの静寂せいじやくの後、

「……そうだな。やっぱりワタル君が撃たれたところに行ってみる……。今は、それしか方法は浮かばないみたいだしね」

シヨウタさんはそう言って、ガツ、と椅子が倒れるくらいの勢いでたった。

「！？ ちょっと、隊長！！」

コースケさんの語尾が少し強くなった。

「コースケはメグム君と一緒に他の方法を考え出すんだ」

シヨウタさんの言葉は、なぜか断れないような雰囲気を感じた。  
それでいて、どこか諭さとすような響きを含めていた。

それをコースケさんも感じとったのか、

「……ハイ、わかりました。でも念のため、気をつけてください」と、自ら身を引いた。

シヨウタさんは、コースケさんの言葉に「ああ」と一つ頷いて、

「メグム君。あとは頼んだよ！ 石は僕が見つけてくる」

そういつて部屋を出て行ってしまった。

「……隊長がああ言ったんだ。僕たちは何としても方法を考えよう！！」

行き詰った様な顔をしていたコースケさんだったが、シヨウタさんの言葉の所為か、今は引き締まった顔をしていた。

シヨウタさんには失礼だけど、あまり人を引き連れる様な、リーダーという感じがしなかった。

なんだか冴えないというか、迫力がないというか。

それなのに、石の話になった瞬間目つきが変わり、話す言葉には迫力がでた。

気迫と言っても間違いではないだろう。

言葉には迫力だけじゃなく、説得力もあった。

まさに、リーダーと言つべき人だった。

驚かされたこともあったけど、何より少し懂れた。

自分があの立場だったらどうしただろうか？

たぶんこの部屋で回らない頭を抱えて、足踏みでもしてるんだろうか？

でもなんでこんなにも色んなことを考えてるんだろ……

「はい、考えましょう。どうにかして……って、あれ？」

ふと疑問に思ったことがある。

「……？ どうしたんだイ？」

「あの。まず、ワタルに聞いてみませんか？」

考えたら、石に最後に触れたのがワタルだとしたら、今あの石の場所を知っている可能性が一番高いのはワタルじゃないか。

色々なことを考えすぎて、こんなに単純な方法を忘れていた。灯台下暗しというやつか。

「そうだね。まさかそんなところ見逃しているなんて……！ よし、ワタル君の検査が終わったら聞きに行こう」

「えっ、検査？」

俺はコースケさんがさらつと言った言葉に、すぐに反応してしまう。

「あ、そうか！ すまない、言ってなかったかな。今、ワタル君は血の検査をしてるんだヨ」

いやいや、そんな重要なことをなんで言ってくれないんだよ!?

思わず心の中でツツコミをいれてしまった。

だって、血の検査があるなら石なんてなくてもわかるんじゃないか？

「でも、それなら石が無くてもあるんじゃないですか?」

「それはわからないヨ。検査といっても石の反応後調べるわけじゃないからネ」

じゃあ何を調べてるんだ？

「この検査は石に触れる前の血が、あのファイルにあった血にどれだけ近いかを調べることなんだ」

「それならファイルにあった血よりワタルの方が凄かったら、分からないんじゃないですか?」

「今回はそうかもしれないナ。ハッハッハ、検査の結果が意味ないとはネ」

しかし、なんでワタルだけを検査したんだ？

一応俺も人間だ。

血は流れてるんだけど……

そんなことを考えていると、「ああ、これが終わったらメグム君も検査を受けてくれないかい?」とコースケさんが言った。

「ハイッ。何も無いと思いますけど」

コースケさんは少し笑っている。

俺もコースケさんもやつと見えた兆<sup>きざ</sup>しに、少し力が抜けていた。

「…………ふ……………」

背もたれの無いイスに寄りかかろうとして、少し体勢が崩れた。体勢を立て直しコースケさんを見て、

「コースケさん、結局ワタルは」と言いかけたところで、こんこん、と控えめなノックの音が部屋に響いた。

「すみません、アヤメです。レイナさんから検査結果を預かってきました。…………隊長はいますか？」

「ふむ、アヤメか。こちらはコースケなんだが…………隊長はいないから僕にみせてほしィ。入ってくレ」

そついうと、すこし時間をおいて「はい！失礼します」とアヤメさんが入ってきた。

アヤメさんは俺に気づき、軽く頭を下げて「どうも」とだけ言ってきた。

俺は至つて普通に、「はい、どーも」

と答えたが、どうもアヤメさんは緊張しているように見える。

…………コースケさんが苦手なのかな？

結果の紙を渡す手が少し震えているように見えた。

「これなんです……………。お願いします」

「ありがとウ」

コースケさんは手に持った紙をゆっくり見ていく。  
ああは言っただけ、確認するのが緊張するのは仕方ない気もする。

紙を見たコースケさんが少し残念そうな顔をした。

やっぱり反応は分からないものだったのか。

「ダメでしたか？」

「ん、珍しいことは確かだけど分からないのも確かだよ。こんな結果は……あれ？」

言葉が切れ、コースケさんの顔から苦笑いが消えた。

それから机の上にあるファイルを乱暴にとり、ばたばたとページをめくり始める。

焦っている様で、ページはくしゃくしゃに折れてしまっている。

突然すぎて俺はアヤメさんと顔を合わせてクエスチョンマークを浮かべている。

「あつター!! あつたぞ!! これを見てくれ!!」

そう言っただけコースケさんは、俺の前にファイルの1ページと検査結果のかかれた紙を並べて見せてきた。

「こっちのファイルの方は石に触れている途中の血を検査したものなんだ!! 言っただけええ、黒い石の反応をしている血なんだ!!」

そう言っただけ、ファイルの方に視線をおくっている。

「そしてこっちは、さっきワタル君を検査した結果なんだ!!」

今度は、そっちの紙の方にコースケさんの視線が行っている。俺も両方を見比べてみる。

あれ？

ワタルの結果はファイルの血の結果を、全<sup>て</sup>上回っていた。

そのうえ、同じものが全てであった。

もっと言うと、ワタルの結果はファイルには無いものさえ集めていた。

「ワ、ワタルは……、まだ、反応が続いている！？」

「そうなんだ！！　ワタル君は、反応が続いている！！　ワタル君は、あの石を持っていたのか！？」

違う、ワタルが石を持ってるわけない！！

あの時は、【よく分からないが、敵だと思っやつらが探していた黒い石】くらいしか分かっていない。

つまり、ワタルがそれを重要だと思い、あんな重い石を軽い気持ちで持っていく訳がない。

というか、そんなのを持っていたら誰だっ<sup>て</sup>その状況に気付くだろう。

「なんであいつはあんな重そうな石抱えてるんだ？」と。

なんでだ……？

わからない。

分らない。

どうしたら、分かるんだ！？

「なんで、ですか！？」

コースケさんは少しうつむいてしまった。

「く、それは僕にモ……！」

なんでなんだ……？

どうしたら分かるんだ。

そうだ。

「そうだ……！」

「「ワタル（君）に会いに行こう（ウ）！！」」

俺とコースケさんは、一瞬視線を合わせて立ち上がった。  
アヤメさんは驚いて、「あの、どういう事ですか？」と、立ち上がってオロオロしている。

「ワタルはどこにいるんですか！？」

俺の質問にアヤメさんは口をあわあわとさせ、

「えっ、あの……たぶん、検査してから移動してないと思います！」と、言った。

考えたら、俺はその場所を知らない。

「クソッ、どこだ!？」

「場所は僕が知ってル！ メグム君、ついて来てくれ！」

俺はコースケさんの言葉に頷き、扉を出るコースケさんの後を追った。

廊下を走り、エレベーターの前に立つ。

コースケさんは、一度緑のボタンを押す。

すぐに扉は開いて、中に入る。

すぐに青のボタンを押すと、フワッという感覚と共にエレベーターが動き出した。

二人して貧乏ゆすりをし、気づいてはやめるを繰り返す。

この時間は妙に長く感じた。

何秒かすると、扉が開いた。

コースケさんのほば横を走る。

いくつもある扉の中からコースケさんは一つを選び、扉を開ける。

コースケさんは「すまない！ 失礼するヨー！」と言い、俺は「ワ

タルッ！』と、  
叫ぶ！

## 第十一章（後書き）

最後の終わり方が斬新ですね！  
ふむ、次が早くなるといいな……

では、また次まで、またお会いしましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0790o/>

---

アフター・デイズ

2011年10月7日19時38分発行